

ず、驕慢の振舞が多かつたらしい。紫式部がその日記に「清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人、さばかりさかしたち、眞字かき散らして侍る程も、よく見ればまだいとたへぬことおほかり」と言つたのを見てもわかる。

しかし定子が世を去られたあとは、失意の地位に立ち、傳説によると、可なりわびしい日を送つたやうである。「古事談」によると、少納言の老後、都の若い殿上人がその宅の前を過ぐる時、宅の破れ果てたのを見て、少納言の零落を嘲つたのに、少納言は簾を掻き上げて「駿馬の骨を買ひし例あるを知らずや」といひ、

とふ人にありとはえこそ言ひ出でね、われやはわれと驚かれつゝ

と詠んだと傳へられる。これはよく彼女の性格を物語つてゐる。その終りは小野小町と酷似してゐて、小町は美人薄命、清少納言は才媛薄倖とでもいふべき趣があつた。

(2) 清少納言の文學的立場

紫式部と清少納言は、その性格が全く相反するが如く、同じく日本的な美を創造しながら、その表現形式を異にしてゐる。式部は美の表現形式を小説の上に借り、少納言は發表形態を隨筆の

上に借りた。清少納言は、その遺傳系統の上から考へれば、どうしても歌人として進展しなければならなかつた。彼女は昔にその父に於てすぐれた歌人を見出だしたばかりでなく、その曾祖父清原深養父に於ても亦第一流の歌人を見出だしたのである。代々歌人系の家に生まれた彼女が、歌人として卓越し得ぬ筈がない。否、さういふ素質が夙に十分にあつた。それにも拘らず、歌道に専念しないで、隨筆方面に赴いた事に就いては、二三の理由がある。

それは彼女に詩人としての素質があつたに拘らず、やや理論的傾向をも持つたことで、彼女の歌が兎角理窟に陥りやすかつたのは、それが爲である。一つは彼女の曾祖父や父に負けまいとして固くなり、何等か新しい道へ出てゆかうとして、却つて失敗したのではなかつたか。いづれにしても、短歌は彼女の長所でなかつた。それなら、當時勃興しはじめた物語——小説の方へ出てゆくとしたら、どうであるか。この方面に於て、彼女は必ずしも、資格がないわけではなかつたらう。が、彼女は長く構想に熱中して、仕組んだ事象を丹念に氣長く纏める性質を持たなかつた。かういふところは短歌的で、その感じ、その思ひを利那的にはつと放射する才能に長じてゐた。言を換へれば、短歌となるべき詩想を短い散文の形を借りて表現する上に彼女の天才が宿つた。即ち才氣煥發、機才銳利で、それをちつと沈潜させて置くことが、彼女には出来なかつたのであ

る。それ故、彼女は、多くの女流が物語——小説にゆき、歌にゆき、日記にゆくの冷やかに見やつて、彼女独自の世界——隨筆に赴いたのである。

ところが、紫式部は、清少納言と傾向を異にしてゐた。彼女はその父に於て、文章生に擧げられた卓越せる文學者を見出だし、彼女もまた散文に於て、そのよき素質を承けついたのである。その點は、代々歌人の家に生まれた清少納言とちがつてゐる。即ち、紫式部には歌才もあつたが、より多く文才があつた。それ故、その構想に久しく時を費し、これを丹念に取り纏めてゆくエナジーを持つてゐたといへる。それであればこそ、彼女は物語——小説の世界へ出てゆかうとしたのである。

それに紫式部の閱歴が示す如く、彼女は清少納言よりも世の中を能く知り、世相を観る上では、清少納言よりも遙かに長じたところがあつた。言ひかへると、人生の考察にかけて、彼女は卓越した眼識を持つた。ちつと靜かにうつりゆく世相を凝視して、そのうちに詩を見出だし、生の意義を發見することは、彼女の得意としたところであつたらうと考へる。紫式部が物語の世界に新しい領域を拓かうとしたのは、さうした事情によると思はれる。

(3) 枕の草子の特色

枕の草子の特色は左の諸點にある。即ち、第一、強い個性が出てゐること。第二、趣味性が該博で洗煉されてゐる事。第三、觀察が細かくて、奇警なる事。第四、色彩、音響などの美について鋭敏な事。第五、文章が簡勁で印象的手法に長ずる事などである。

(第一) 彼女の個性は強い。誰の前に於ても、その發露を抑へようとしなない。紫式部は少くとも表面控へ目であるが、清少納言は大膽率直にその所感を披瀝して憚らない。それは彼女の平生の言行に於てもさうであるやうに、筆の上に於ても亦同様である。ある意味に於て、賢女型に囚はれず、因習に束縛せられぬところに、彼女の面目が躍動してゐる。驕慢とか衒學的とか自己吹聴とか非難せらるる丈けそれ丈け、彼女には特異性が見える。かうして、彼女は、その對象とする自然、人事一切に批評を下し、その美不美乃至是非如何を述べ、特に鋭い諷刺の心をも寓した。この事が、枕の草子の獨自性を確保する一因となつてゐる。

(第二) 彼女の趣味は該博で、天地山川から花鳥風月、草木禽獸にも及んでゐる。人事一切にもまた興味を抱いてゐる。その品題に上つたすべては、彼女の感じの上に映つたもので、その好惡

一切に關して洗煉せられた趣味性を標準として判断せられてゐる。それ丈けに垢ぬけした好みが多く、可憐・優美なものを殊に愛好した。言ひかへると、それは彼女の如き特殊の女性に見出だされ、讚稱さるる純日本美である。さうした點が、彼女の隨筆に非凡の閃光を放つてゐる。

(第三) 女性の長所は觀察の細かいところ、行き届いたところにあるが、殊に清少納言に於て、それが著しい。一般婦女の氣の附かぬやうな些事にも眼を着けて、好惡を云々してゐる。のみならず、清少納言の見方は萬事、人の意想外に出て、奇警の趣を帯び、讀者を驚かし魅了する。例へば、「雀の子のねずなきするにをどりくる。又べにつけてすゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし」といひ、或は「三つばかりなるちこの、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなる小指ゆびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし」などの如きは、誰も見のがしやうい織細美を巧みに捕へてゐる。また彼女が、「似げなきもの」として「齒もなきに梅くひて酸がりたる」とし、「ことごとしきもの」に「文學博士」を擧げてゐるなども、奇警であり痛快である。更に彼女が一目見て繪畫的の品題を掴むことに巧妙であつたのは、やはり、その觀察眼の非凡を證するものである。

「五六月の夕がた、青き草を細う、うるはしく切りて、あかぎぬ着たるちこの小さき笠を

着て、左右にいと多く持ちゆくこそすゝろにをかしけれ。」

「月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などの割れたる様に、水の散りたるこそをかしけれ。」

「雪高うふりて今もなほふるに、五位も、四位も色うるはしう、若やかなるが、うへのきぬの色いと清らかにて、革の帯のかたつきたるを、とのみすがたに引きはこえて、紫のさしぬきも雪に映はえて、濃さまさりたるを着て、柏かしらの紅ならずば、おどろくしき山吹をいだして、からかささをさしたるに、風のいたく吹きて、横様に雪を吹きかくれば少しかたぶきて歩みくる、ふかぐつ、はうくわなどのきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ。」

以上は人事美についての分を擧げたのであるが、自然美に於ては、その見方が更にそれ以上に精緻であり、的確であり、秀拔である。それは枕の草子の初めにある四季の敘景文に徴しても明らかである。

(第四) 清少納言の色彩に對するセンスは最も鋭敏で、彼女の言葉には、色彩のことに關するものが多い。ある意味に於て枕の草子は色彩美の世界であり、色の交響樂、管絃樂の世界でもある。

もし枕の草子から、彼女の色彩についてのセンスを除くならば、興味的一半を減殺するにちがひない。それ程、彼女は常に色彩美を説くことを忘れなかつた。「扇の骨は」とあるところに「あを色は赤き、紫はみどり」といつてゐるなどは、いかにも色の配合に關する的確な彼女の考へを示してゐる。扇（蝙蝠扇）の青い地紙には赤い色の骨が似合はしく、紫の地紙には、緑の色の骨がふさはしいといふのであつて、彼女は巧みに對照美の骨髄を道破した。さういふ色彩の好みは左の短い文章の上にも表現せられてゐる。

指貫は

紫の濃き。萌黄。夏は二藍。いと暑き比、夏蟲の色したるも涼しげなり。

ひとへは

白き。ひの装束の紅の單、^{ひとへ}柏などかりそめに着たるはよし。されど猶色黄ばみたる單^{ひとへ}など着たるは、いと心づきなし。ねり色のきぬも着たれど、猶ひとへは白うてぞ、男も女も萬の事まさりてこそ。

下襲は

冬はつゝじ。かいねりかさね。蘇芳襲。夏は二藍。しらがさね。

彼女が平生深く色彩に注意したことは、洛東清水に籠つてゐた頃、一條院の女御定子から手紙を賜はつた返事を差上げた時の様子にも知られる。その事に就いて彼女は、「清水にこもりたるころ、ひぐらしのいみじうなくをあはれときくに、わざと使しての給せたりし、からの紙の赤みたるに山近き入相の鐘のこゑごとに、こふる心のかずはしるらむものを、こよなの長居やと書かせ給へる。紙などのなめげならぬもとり忘れたるたびに、紫なる蓮の花びらにかきてまゐらす」と記した。紫色の蓮の花の散らし花びらに、返事を書いたといふ上に、彼女のすぐれた好みがかかる。その他自然美の上に於ける色彩や光線の見方に於ても亦、著しくデリケートな點があつた。例へば月光を描いて、「有明のありつゝともうちいひさしてのぞきたる髪のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光」と述べ、春の曙を敘述して、「やうくしるくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の、ほそくたなびきたる」といひ、暮色を記して、「入りはてぬる山際に光のなほとまりて明かう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる」といへるなど、いづれも、色彩、光線についての彼女のセンスの鋭さを示してゐる。彼女が月色美について、「ありあけ、ひがしの山のはに、細う出づるほどあはれなり」といひ、星の美について、「すばる、ひこぼし、みやうじやう、夕づゝ」と數へ、雲の美について「白き、紫、黒き

雲あはれなり。風吹く折の天雲、明けはなるゝほどの、黒き雲の、やうく白くなりゆくもいとをかし。朝に去る色とかや、文にも作りけり。月のいとあかき面に、薄き雲いとあはれなり」と述べてゐるのも首肯される。

それから清少納言が音に關するセンスが亦鋭敏であつたことは、「冬のいみじく寒きに、思ふ人と埋づもりて臥して聞くに、たゞ物の底のやうに聞ゆる」と鐘の音の美を表現したのでもわかる。また四季の敘景中、「日入りはてゝ、風のおと、蟲の音などいとあはれなり」と言つたあたりに、彼女が深く心を傾けて聴き入つた様子がそれと察せられる。

(第五) 清少納言の文章は簡勁で印象が深く、一の贅字なく、一の冗語がない。全く緊張、充實して、その自然を描き、人事を描くについては躍動の妙を極め、餘韻あり餘情あり、洗煉されつくして、これ以上の確の言ひ現し方がないことを想はせる。蓋し、彼女の鋭い直観は、その記さうとする事物の中核に突き入つて、ある焦點のほかは、すつかり省略し、印象的手法を巧みに活かした結果、右のやうな効果を收めたものと思ふ。當時彼女が枕の草子を書く前には、度々習作したのであらうと察するが、さうした習練の後に、彼女は格を破つて格に入る文章の妙を悟り、独自のスタイルを創造したのである。

(4) 清少納言の人生批評

以上の諸點が、從來の國文學者が枕の草子の特色として許したものであつたが、我々が右の外に、枕の草子を読んで感ずる面白さは、先づ第一に其の皮肉な批評的態度である。枕の草子は趣味から見た清少納言の自傳ともいふべきものであるが、これによると、彼女は事物を見るのに正面からしないで常に裏面側面から見、玄關からみないで臺所から見た。常套を悪んで奇抜を喜んだ。人の見る所、知る所を言ふのを屑しとしないで、人の看過して注意しない所に鋭い觀察を試みた。彼女は雋、辣、奇、鋭で人の胸にびりつと來ることなれば、言ふに足らない書くに足らないと思つたらしい。「語不驚人死不休」とは、杜子美よりは寧ろ清少納言の道はんとした所であつた。従つて彼女の作には隨所に小氣味のよい所がある。痒きを搔き、藥味を味はへるやうな趣がある。彼女が平凡な普通事に思ひもつかない意味を見出だして辛辣の皮肉を弄ぶ點に於ては、兼好法師や樂翁公等もその足もとにも寄りつけないのである。

吾々が枕の草子に對して第二に面白く思ふのは作者の放浪趣味である。無責任な高見の見物の態度である。彼女は自ら修めんが爲に生まれたのでなく、又人を教へんが爲に生まれたのではない。

ただ批評せんが爲に生まれた。従つて、その奇抜な觀察批評に誇りを感じるのを、此の上ない愉快とした。彼女の作には至る所に御殿女中の風があり、野次馬、居候の趣がある。彼女には定着性がない。彼女には定まつた戀人がない。彼女は其の戀人が自分に熱するのを熱しないのをも、冷淡に批評的に見る餘裕があつた。彼女には老いても窮しても駿馬の骨たるを失はない奇骨があつた。彼女は如何なる男子とも結婚して家を成すことが出来なかつたらうと思はれる。彼女があの名門清原元輔の一人娘でありながら遂に老嬢に終つたのは、その好める趣味に殉じたのであらう。かういふ性質の人は如何に文才があつても、源氏物語のやうな脚色のある大作を營々役々として氣長く仕上げるに適しもしなければ、又仕上げ得る筈のものでもない。彼女が印象式のスケッチ、興來れば筆を執り、興去れば筆を擱く隨筆物に其の才を發揮したのは、實に其の處を得たもので、彼女は天命天賦に従つて國文學に於ける隨筆の第一人者となつたのである。

その他、吾々が枕の草子及びその作者に對して興味を感じることを列擧すれば、彼女が他の多くの批評家のするやうに、拵へた取り置きの人生活觀で机上の空な批評をしないで、生活其のもので時世を批評して居るのが面白い。彼女の皮肉的批評に堂々たる態度はないけれども、わるびれず、さつぱりして、褒められやうなぞといふ慾がなく、褒貶を意に介しないで悠々として皮肉をいふ

所も面白い。印象的とは言はれるけれども、精髓を寸鐵式に撮記する手腕と、趣味ある節々をだれぬやうに精寫する手腕とを兼ねたのも面白い。平安朝の物語が多く男子に女子を弄ばしめて居るのに對して、ただひとり枕の草子が髭男を手玉に取つて女子の爲に氣焰を吐いて居る所が、遙かに竹取と相應して面白く、又「女は物うるさがりせず、男に欺かれる爲に生まれたものぞ」と言つた源氏の婦人觀と相對して面白い。

要するに枕の草子は、其の形式といひ、文章といひ、題材といひ、作者の天賦に相應した作物であつて、又時代に相應した作物である。かういふ作品は脚色を標準として論すべきものではなくて、ぼつくと點じた興書きに興味を見出だすべきものである。従つて此の點に於て源氏と相對して平安朝文學の雙璧と言はるべきものである。

第五章 古今和歌集

(1) 六歌仙時代

既に「概説」に於て述べた如く、平安時代の初期は漢文學の隆盛時代であつて、和歌の方面は萬葉時代から見れば大いに衰へた。しかし漢詩流行の極、やがてその反動時代がやつて來た。今迄漢詩のために下積みとなつてゐた短歌が漸く頭をもたげ始めたのは、文徳天皇の時代から清和、陽成、光孝の諸天皇の治世にかけてであつて、これは支那文學模倣から離れようとする日本的自覺のためであるが、短歌復興の原因は別に他にもあつた。それは「漢詩」といふ詩形には、いろいろのむづかしい窮屈な條件があつて、詩情の發露を拘束せられるだけでなく、時として心にもないことを述べて、僅かに漢詩としての面目を保持する場合も少くなかつた。かういふ點について既に聊か氣づいたものに小野篁があり、菅原道眞があつた。拘束多き世界から自由の世界へ、虚飾多き方面から眞情に満ちた方面へ、支那的な詩の國から日本的な歌の王國へ、かう先覺者は

考へはじめた。それに平安時代の主要現象たる戀を歌ふに當つては、殊に戀について相思の人々が歌を贈答するに當つては、漢詩では用を辨するわけにゆかない。やはり、短歌によつて、眞情を流露するよりほかはないのだ。以上の様な事情のもとに日本人に不向きであり不便である漢詩から離れて、日本人に都合よくびたりと當てはまる短歌に赴くべき新機運を生じたのである。かうした新機運の先頭に立つた人は在原業平で、それに續いたのが僧正遍昭、文屋康秀、大友黒主、喜撰法師、小野小町等である。即ち六歌仙と呼ばれ、古今集に行くまでの橋がかりとなつた人々である。

平安歌界の曉鐘第一聲を告げたのは在原業平である。勿論、業平と前後して短歌を詠んだものがなかつたのではない。例へば、菅原道眞に「東風吹かば香ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春を忘るな」などの詠があり、小野篁に「わたの原八十島かけてこぎ出でぬと、人には告げよ海人のつり船」の歌がある。この二人は漢詩の弊を自覺せぬではなかつたが、なほ漢詩に重きを置いた風が見えて、いくらか短歌を餘技視した傾きがあるやうに思はれる。ところが、業平はさうでなかつた。彼は漢詩流行に反逆して國詩に立脚し、この方面に滿腔の熱情を注いだ。言ひかへると、彼は「萬葉」以後、一時衰へた歌界の狀勢に不満を感じ、進んで短歌に新しい呼吸を吹きか

けた人である。

業平は平城天皇の皇子阿保親王を父とし、桓武天皇の皇女伊登子内親王を母として生まれた。彼は風采閑雅、情熱にまかせて自由に行動した詩人肌の人物だった。貞観十四年、勅命により、鴻臚館に於て渤海の使者に應接したことがある。彼は平生、文徳天皇の皇子惟喬親王に接近したが、藤原良房の専權の爲、親王が不遇の境地に立たれると、深くこれに同情した。依つて、密かに洛北小野の里に閑居した惟喬親王を訪ひ、「忘れては夢かと思ふ、思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」と無限の感懐を述べた。が、業平はひとり惟喬親王に心を傾けて、良房に反抗しようとしたのではない。一面、良房にも好意を寄せたこともあり、藤原氏によつてその地位を高めようとした場合もある。つまり、彼は情熱の子で、多少の反抗心をも有し、一生思ひの儘に振舞つたのである。これが彼を詩人として成功せしめた所以である。彼は天慶四年、五十六歳で卒去したが、官は從四位上藏人頭、右近衛中將に至つた。

業平の閲歴が示す如く、短歌復興の第一線に起つた彼が先づ貴族階級中に於て最もよき家柄の人であつたことが、既に平安文藝の傾向を示してゐるやうに思ふ。歌人としての彼には匠氣がなく誇張がない。有りの儘の感想を有りの儘に歌ふといつた調子で、技巧に於ては、なほ念が行き届かぬ憾みがあるが、それは眞實な内容によつて補つてゐる。例へば、「つひにゆく道とはかねてしりしかど、昨日今日とは思はざりしを」、「ねぬる夜の夢をはかなみまどろめば、いやはかなにもなりまさるかな」の如き實情を表現した歌に於て、最もよく彼の長所を發揮した。それは、いづれも眞實の聲である。

かく情熱を以て、歌の生命とした彼に於てさへも、「萬葉」時代の眞實一路から漸く離れて、不知不識、時代の傾向に動かされ、理智的、遊戯的な分子をその歌の上に加へ來つた兆が見えるのは止むを得ぬことと思ふ。例へば「世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし」などは、そこにいくらか理智的傾向を示してゐる。前人のあとを踏襲しまいとすの彼の心持はわかるが、そのため却つてその眞情の美を失つた氣味がある。が、「櫻花ちりかひ曇れおいらくの、來むといふなる道まがふがに」の如く、或は「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ、わが身一つはもとの身にして」の如く、率直に眞實を打ち出した調子のもに、よいところが見える。そこに虚飾なく、虚偽なく、人の胸を打つ力がある。

業平と共に貞觀、元慶の時代に短歌開拓の爲に盡くした人に僧正遍昭がある。彼も亦業平の如く熱情を抱いたことは、彼が平生寵遇を受けた仁明天皇崩御の際、世を悲觀して佛門に入つたとい

ふ點にも知られる。遍昭は俗名を良峰宗貞といつて、桓武天皇の皇孫である。出家前、彼は風流人として聞え、花晨月夕、青春の歡樂に耽つたこともあつて、概ね洒落な風が見えた。佛門に入つてからも、彼はなほ青春の若々しさを失はなかつたが、操持は嚴正に近く、朝野の仰慕するところとなつた。その名利に淡泊であつたことは、仁明天皇の皇后が彼を尊信して度々宮中に召されたれにも拘らず、高野山にかくれて出なかつた様子にも知られよう。

さういふ人格や心持が、遍昭の歌の上に現れてゐるやうに思ふ。當時に於ける新時代の傾向として、遍昭にも理智的、遊戯的ところが、ほの見えてゐる。が、彼の洒落な潤ひある性情が、自らその缺陷を救うてゐる場合が往々ある。彼は熱情の人にちがひないが、業平の如く、その眞情を大まかに打ち出さないで、修辭、構想にも工夫を加へ、前人以外に、彼独自の歌境を開拓しようとする。かの「花の色は霞にこめて見せずとも、香をだに盜め春の山風」の如き風調は、遍昭が初めて試みたところと言つてよい。

彼の歌は洒落そのものである。その厭世觀を披瀝したものとさへも、洒落の調子を帯びてゐる。「蓮葉のにごりにしまぬ心もて、何かは露を玉とあざむく」と喝破したのは兎も角、「秋の野になまめきたてる女郎花、あなことぐし花も一時」「末の露もとの雫や世の中の、おくれ先だつためしな

るらむ」の如きに至つても、調子が洒落だ。更に彼が擬人法を用ゐて、特技を發揮した歌、「よそに見て歸らむ人に藤の花、はひまつはれよ枝は折るとも」「名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花、われおちにきと人に語るな」なども亦洒落である。が、場合によつては、洒落のうちに一味の艶情を湛へた歌もある。例へば、或日、彼が石上寺で小野小町に逢つたとき、小町から進んで彼の歌才を試みようとして、「岩の上旅寝をすればいと寒し、苔の衣をわれにかさなむ」と挑むと、彼は「世をそむく苔の衣はたゞひとへ、かさねばうとしいざ二人ねむ」と答へた如き、或は五節の舞姫を見て、「天津風雲の通路ふきとちよ、少女の姿しばしとゞめん」と歌つた如きは、それである。彼は厭世の歌を詠んだが、別段重苦しいところがなく、淡泊に世を送り、少しも滯滞せぬ。曾て諒闇の期が過ぎて、殿上人がにび色の衣をぬぎ、華やかな装ひに歸つたとき、遍昭は人知れず、柏の葉に歌をかい付けて、彼等に贈つた。それには、「みな人は花の衣になりぬなり、苔のたもとよ乾きだにせよ」とあつた。かういふ風に彼の洒落は本質的であつたが、その子玄利にも、「法師の子はやはり法師になるがよい」と言つて潔く出家せしめたが、名を素性法師と呼び、彼に似て短歌に長じた。その作には、「そこひなき淵やはさわぐ山川の、浅き瀬にこそあだ浪はたて」「今こむといひしばかりに長月の、あり明の月をまちいづるかな」などがある。

遍昭と同時代の歌人として、古風の味を湛へ、自ら一家の妙趣を保つたのは大友黒主である。彼は滋賀近江郡の大領で園城寺の地主であつたため、久しく地方にゐて都の風に染まず、自ら「萬葉」にちかい風調を愛した。この點について紀貫之は慊らず、「大友黒主は心は高くて、その様いやし、いはば薪負へる山人の、花の蔭に休めるが如し」といひ、新時代の傾向に近づかうとしないのを不可とした。が、黒主の長所は、寧ろ貫之が見て短所としたところにあると言つてもよい位である。

黒主の歌は、高古の趣があつて風調優雅、落着きがあつて、往々餘情の掬すべきものがある。「玉津島ふかき入江をこぐ舟の、うきたる戀も我はするかな」、「白浪のよする磯間をこぐ舟の、楫とりあへぬ戀もするかな」、「おもひ出でゝ戀しき時は初雁の、なきてわたると人しるらめや」などは、彼の独自の味を出した作であらう。

黒主と同時代に、文屋康秀があり、喜撰法師があつて、六歌仙のうちに數へられ、紀貫之は「文屋康秀は、詞たくみにて其のさま身におはず。いはゞ商人あきとのよき衣着たらんが如し。宇治山の喜撰は、詞かすかにしてはじめをはりたしかならず、いはゞ秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し」と言つたが、事實、それ丈けの業績を今日見ることが出来ぬ。殊に喜撰の歌は大方傳はらぬ

し、人物もわからぬのである。

小野小町の生涯は殆ど分明しない。或は衣通姫の女と云ひ、或は小野美材たじの従妹だと云ひ、或は出羽郡司の女、比古姫であると云ひ、諸説紛々として決しない。唯比較的事實らしいと思はれるのは、小町が宮中に仕へた下級女官の一人で美貌の名高く、早くから歌才を示したといふことである。かく彼女の生涯は、はつきりせぬが、その歌を見ると、一種の自叙傳を爲してゐて、彼女の花の盛りの頃から、老衰時代の倂を偲ばしむるものがある。

彼女の歌は平明な詞句のうちに、強い感じを打ち込み、優麗にして哀婉の妙がある。紀貫之は、これを評して、「小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて強からず。いはゞよき女のなやめる所あるに似たり。つよからぬは女の歌なればなるべし」と言つた。その美に輝く得意時代の歌には、「みる目なき我が身を浦としらねばや、かれなであまの足たゆくくる」、「あまのすむ里のしるべもあらなくに、うらみむとのみ人の云ふらむ」などがある。更に彼女が戀に心を傾倒した時代の歌には、「いとせめて戀しき時はうば玉の、夜の衣をかへしてぞぬる」、「うたゝねに戀しき人を見てしより、夢てふものをたのみそめてき」、「思ひつゝぬればや人の見えつらむ、夢としりせばさめざらましを」などがある。いかにも、そこに女性らしい優しみが流れてゐる。

さう云ふ輝かしい時を送つた彼女も、時に不如意を感じた折がある。「色みえでうつろふものは世の中の、人の心の花にぞありける」の歌は、彼女の苦い體驗から出たのであらう。そのうち、やがて小町の美がすがれゆく頃になると、彼女は自ら正直に述懐して、「花の色は移りにけりないたづらに、我身世にふる眺めせし間に」と詠み、「海人のすむ浦こぐ舟のかちをなみ、世をうみわたる我ぞかなしき」とも歌つた。晩年、文屋康秀が三河國へ下るについて彼女に同伴しようと言ふと「わびぬれば身を浮草の根をたえて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」と心弱い、うら悲しい心を表白した。かうして彼女はその後を孤獨、寂寥のうちに送つて、美人薄命の事實を示したのである。が、彼女の美は永劫でなくとも、彼女の歌の生命は今に朽ちない。

(2) 古今集の成立・内容

古今和歌集が世に出たのは延喜五年四月である。これより先、醍醐天皇は、漢詩よりも和歌を好まれ、平生御製も亦多いが、曩に嵯峨天皇の治世に漢詩の勅撰があつた以上、當代に入つて和歌の勅撰もあつて然るべきであると思召された。依つて紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑等に勅してその家集を獻せしめ、更に古來、「萬葉集」に入らぬ和歌などもあつめ、嚴撰せしめ

られた。それが成ると「續萬葉集」と稱したが、重ねて勅命を下し、それを分類して二十卷とせられ、新に「古今和歌集」と題せられたのである。この時迄、和歌は漢詩よりも下位に置かれ、主に戀についての贈答應酬を爲すにすぎぬとせられてゐたが、「古今和歌集」の勅撰成るに及び、文學上、正當の地位を認められ、漢詩を壓倒せんとする勢を示したのである。要するに、それは文學上、異國の風を模することをやめ、日本的自覺の上に立脚して、その藝術味を發揮すべき機運の熟したことを示すものといつてよ。

その内容は、春、夏、秋、冬、離別、驕旅、物名、哀傷、雜歌、雜體（長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所歌、東歌）などに分類せられてゐるが、それは「文華秀麗集」「萬葉集」などの分類法を折衷して用ゐたのである。そのうち、曾て「萬葉」に於て最も勢力を占めた長歌は「古今集」に五首ばかり收められてゐるにすぎぬ。蓋し、かくの如く長歌が衰へるに至つたことは、「萬葉」時代にも豫示せられた傾向であつて、徒らに言葉の修飾に忙がはしく、内容の空疎に近い弊が夙に長歌にあつた。さうした傾向が、平安時代に入つて一層甚だしくなつたのみならず、長歌を製作するの風も亦少くなり、結局、衰微せざるを得ぬ運命となつたのである。

次に一番優勢な短歌のうちで、最も多きを占めたのは四季と戀愛とに關するものである。蓋し平

安人の生活は戀愛中心で、すべて戀愛を離れて人生はないといった調子であつた。且つ彼等は四季折々の風光に打ち興じて、遊觀に時を送ることを楽しんだ爲に、自らさうした方面に深い關心を持つた。「古今集」中、戀の歌、四季の歌が多いのは、それらのためで、曾て「萬葉」に見た愛國の歌、忠義の歌、尙武の歌は、全く茲に見られぬやうになつたのである。

(3) 古今集の特色

古今和歌集の序に於ける紀貫之の歌論の大意は、

『和歌は人の心を種としてよろづの言の葉となつたもので、本來眞心まごころを表すべきものである。これにそへ歌、かぞへ歌、なすらへ歌、たとへ歌、たゞごと歌、いはひ歌（即ち風賦、比、興、雅、頌）の六義がある。さて今の世の歌界の大勢を見るに、業平、小町等六歌仙の作を見ても知られる通り、「今の世の中色につき、人の心花になり、あだなる歌はかなきことのみ多く出づ」ることになつた。昔はさうでない。昔は、人君が歌によつて臣の賢愚を知られたこともあり、喜びにつき懐ひを述べて心を慰めたこともあつて、或は政道に資し或は感情を養ふ料となつたものである。されば吾等は今のたはれた、はかない歌を

去つて、立派な深い心持を現した歌をよまねばならぬ……』

といふことに約まる。彼はかやうな趣意によつて前代の業平、小町等が情を主としたのに対して、知を主とし、理窟功利を主とするやうになり、前代の情餘りあつて詞足らぬ歌に對して、形式と内容と、即ち言葉と感情とを五分々々に言ひ整へるやうになつた。

萬葉集の和歌の特色は前篇に於て述べたが、今一度、古今集と比較するために、萬葉集時代から古今集時代に至る和歌の變遷した様子を次にのべることにする。

萬葉集時代には感興の起るに任せていろ／＼の事物感想を詠んだ。此の時代には、まだ和歌専用の感情をきまつた形式に表すといふ事がなく、大體は直情直抒で、單純に素直に思ふがままと抒べたものである。例へば、藤原鎌足の作に、

我れはもや安見やすみ兒得たり皆人の得がてにすといふやすみこ得たり

といふのがある。采女に安見子といふ美人が居て、皆人想ひを懸けたけれども聞かれなかつた。それを鎌足が手に入れたと言つて喜んで、「おれがねえ、安見子を手に入れたんだよ、みんなの得がたい／＼と言つて居たといふ、あの安見子を手に入れたんだよ」と詠んだのである。至つてさつぱりした單純なものである。或は柿本人麿が、

足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかも寝む

前置きの枕詞をとつてしまへば、「此の長い／＼夜を一人で寝ることかなあ」といふだけに約まる。形式や語の數に多少單複の差こそあれ、萬葉時代の歌は、長歌も旋頭歌も皆此の呼吸で詠まれたのである。彼等には感を惹いた中心樞要の利き處を擱んで、それを繰り返し／＼諷詠するといふ趣があつた。

弘仁期の六歌仙、業平、小町等になると、大分趣が違つて來て居る。彼等の歌題は殆ど戀愛と風景とに限られた。而して彼等の作には景色にあこがれ、情に耽り、戀愛に溺れた趣が見える。業平、小町といふ名が後世美男、美女、うかれ男、うかれ女の別稱になつたのを見ても知られるやうに、彼等は憧れ氣味の恍惚とした態度で、耽溺生活を續けて居た。彼等は平安朝の初期の、漢學の行はれた、まだ比較的堅い時代に於て、第三期の源氏物語を産んだ後一條の朝を豫想してゐたのである。彼等の作、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして（業平）

色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（小町）

わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞおもふ（小町）

のやうなものを見ると、彼等が「いつまでも若々しくてゐたい」「刺戟の多い生活を送りたい」などと思つてゐた耽溺の心持が想像される。彼等の作に字餘りの多い事なども、萬葉と古今との間に在ることを説明してゐる。

延喜の貫之等は同じく四季、戀愛を主題としたが、彼等は主として理窟が立つて内容形式の一致することを求めた。十の思想を十の言葉に現して用語、句作り、音調をあくまでも優美に削り上げて行かうといふのが彼等の理想であつた。此の優美主義を短形式の詩歌に用ゐて理想に達したのは古今時代、同じ主義を長形式の物語に用ゐて大成功をなしたのは紫清時代である。但し、貫之をはじめ古今時代の歌には、理窟が勝ち過ぎて情を殺し、その結果やゝもすれば歌が論文の出來そこねになるやうな傾きがあつた。例へば古今集の開卷第一に在原元方の、

年の内に春は來にけり一年をこぞとやいはむ今年とやいはむ

といふのがある。月日の領分争ひが、それだけで詩歌となつて、而もそれが名歌扱ひされて勅撰名歌集の巻頭に据ゑられるといふのは、實に未聞の珍事である。或は貫之の作に、

櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香ににほひける

といふがあるが、調子が整つた所と、理窟を面白く立てた所とを除けば、情の上の味はひとつふものが殆ど無い。貫之は主知主義を提げて業平、小町等の主情主義に反対し、而して主知主義の勝利は、大體に於て古今集の歌の情味を乾燥せしめたのである。

正岡子規は曾つて

『貫之は下手な歌よみにて、古今集は下らぬ集に有之候。……それでもしひて古今集を褒めていへば、つまらぬ歌ながら、萬葉以外に一風をなしたる所は取柄にて、いかなるものにも、はじめてのものは珍らしく覺え申候。』

と貶した。短歌には理窟を禁物とした子規が、理智的傾向の多い古今集を好まないのは當然であるが、短歌を以て最上の文藝的遊戯とのみ考へた當時の歌人達、一面に於て戀の媒介をする機關として短歌を作つたその時勢を考へる時は、その貶し方は少しく苛酷に失すると思はれる。

萬葉の風調は男性的に豪健、素朴であるが、古今の風調は女性的に優美、典雅である。また萬葉の趣味は雄々しく粗剛であるが、古今の趣味は繊細、可憐である。更に前者に含まれた思想は朗かな樂天的色彩を帯びてゐるが、後者に含まれた思想は哀世的、悲觀的である。それに物の見方に於て、萬葉は大まかで、その感覺の線條が太いが、古今は物の見方が細かく、感覺が漸くデリ

ケートになつてゐる。それと同時に、萬葉の純情本位は、古今に於て智巧本位となり、自ら種々の點に於て異なる趣致を示した。

以上の様なはじめを生じたのは、時代の趨勢によるのであつて、どんな歌人でも概ね時代を超越することが出来ず、勢ひその環境、周圍、傾向の制するところとならざるを得ぬからである。既に「枕の草子」「源氏物語」などに於けるセンスが繊細、鋭敏になつてゐることを述べた通り、ひとり短歌を詠む人々のみが、感覺上、粗剛であるべき道理がない。殊に彼等は、萬葉以外に、新しい世界を拓かうとした意氣を有し、必ずしも萬葉の天地に満足しなかつたのである。その爲、萬葉人が割合に重視しなかつた技巧の一點に重きを置くに至つたが、偶々歌合などの競技が一層これを刺戟し、技巧偏重に赴かしたのである。その智巧的傾向も、萬葉以外に新しい見方、新しい感じ方を表現しようとした結果から生じたもので、一概にそれは彼等に於ける詩情の缺乏に原因してゐるとは言へない。要するに、凡ては時代傾向の然らしむるところといふべきである。

(4) 代表歌人

古今集の歌人中、業平以下六歌仙に就いては既に評論を加へた。ここに古今時代の代表歌人と

して、紀貫之、凡河内躬恒の二人の歌風に就いて一言する。

貫之は種々の意味に於て記憶せらるべき先覺者で、文章家、歌人、批評家を兼ね、それ／＼第一流の地歩を占めた。彼は延喜六年、越前少掾、御書所領となり、後、延長八年に至つて土佐守となつた。更に元慶三年、玄蕃頭となり、従五位上に敍せられ、晩年、木工權頭の地位を得て八十五歳の頃、卒去したと傳へられる。

彼は、文學上どの方面から見ても天才ではなかつた。けれども歌を作るにも、文章を書くにも、批評を試みるにも。常に一生懸命で、苦心に苦心を重ね、按配、工夫に長じた。その文章の如きも、彫琢にすぎたところがあるが、能く整ひ、流麗典雅の趣がある。(『古今集』序) 歌に於ても亦同様で、鍛錬を惜しまず、言ひ廻しの上に巧緻なところがあつて、確かに大家の風格を有する。けれども、情熱に乏しく、理智の爲に、ともすると、詩趣を損ずる傾きが見えた。蓋し心情、心熱を主としないで、率直に感性を表白せず、理窟によつて秀句を編み出さうとするのが貫之の弊で、折角の苦心も意義を爲さないことが往々あつた。例へば、「人はいさ心もしらずふるさは、花ぞ昔の香ににほひける」の如き、或は「櫻ばなちりぬる風のなごりには、水なき空に浪ぞ立ちける」の如き、いづれも理窟を主とした歌である。「人はいさ心もしらず」とか、「水なき空に浪

ぞ立ちける」とかいふ表白は巧みであるけれども、唯それ丈けのことで、詩趣素然としてゐる。かの「さくらちる木の下風は寒からで、空にしられぬ雪ぞふりける」も亦同一工夫で、貫之に眞の詩才乏しきを示すものである。

が、貫之にも、時に自然のうま味ある歌がないとは言へぬ。例へば、「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の、川風さむく千鳥なくなり」の如きは、情趣が深く、理智の閃きが少しもない。また「夏の夜のふすかとすれば時鳥、なく一聲にあくるしのゝめ」、「あふ坂の關の清水にかけ見えて、今やひくらむ望月の駒」などは、貫之集中の佳作である。

貫之に對峙して、少しも遜色なき歌人は凡河内躬恒である。彼の經歷は明らかでないが、一生を不遇のうちに送つた人のやうである。が、その詩才は貫之に優り、満身悉く歌ともいふべき本質を具へてゐた。曾て醍醐天皇が御遊ありし夜、躬恒を召して、「月を弓張といふのは何故か」と下問されると、躬恒は即刻、「照る月を弓張としもいふことは、山邊をさしていればなりけり」と拜答し、御感に入つた。その際、天皇から大桂を下賜あらせられると、躬恒は感激して、それを肩にかけ、「白雲のこの肩にしもありゐるは、天つ風こそ吹きてきぬらし」と詠んだ。この逸話によつても、彼が如何に詩人らしい性情を具へてゐたかがわかる。

躬恒には、自己身邊の推移を詠んだものや、親しく世相を觀た感想を託したものが往々ある。人情輕薄の世に心ならず、俗塵に埋もれつつある境地に思ひ及んで、「ときはなる松をばおきてあぢきなく、あだなる山の櫻をぞ見る」と詠み、或は自己の老いたことを悲しんで、「みな人は花のころもを着る中に、ひとりぞ老にしづみはてぬる」と歌ひ、或は淪落の生や厭世の情を述べて、「ことさらに死なむことぞ難からめ、いきてかひなき物おもふ身は」、「わび人のおもふ心をちる花に、そへて雲ゐに吹きつけよ風」と詠めるなど、痛切に人の心を打つ力がある。

彼の歌は貫之のやうに苦吟、彫琢をしない。率直で天真爛漫の風がある。それ故、彼の抒情的な歌、乃至、主觀を投射した歌に於ても、他と異なるところがあつて、そこに理窟つばい嫌味が少い。一體に躬恒は客觀的な歌を好み、貫之が主觀の歌を好むのと趣を異にした。それ故、絳景の歌に秀拔の才能を示して、「秋風に山とびこえてくる雁の、羽むけにきゆる峯の白雲」、「住の江の松を秋風吹くからに、聲うちそふる沖つ白波」、「千鳥なく濱の眞砂をふみわけて、ゆく旅人はあはれ誰ぞも」のやうな秀詠がある。

第三篇 鎌倉時代文學

第一部 鎌倉時代文學概説

(1) 範圍と時代區分

鎌倉時代といへば、通例後鳥羽天皇の文治二年（一八四六）から元弘三年の北條氏滅亡（一九九三）に至る迄の凡そ百五十年間を指すことになつてゐるが、ここでは特に範圍を擴げて、保元平治の頃から南北朝の終り迄の二百二三十年間を指すこととする。元來、此の時代は國文學史上、年代の最もうるさい時代であつて、大まかに見れば、鎌倉幕府の成立から江戸幕府の成立まで、即ち頼朝から家康までを一括して、平安時代文學と徳川時代文學との繋ぎの時代と見られないこともなく、細かく分ければ、源平時代、鎌倉時代、南北朝時代、義滿義政の應永及び東山時代、戰國時代、桃山時代等の數期に分けて見られないこともない。しかしここでは此の長い年代を鎌

倉及び室町の二つに分けて、そして前の鎌倉時代に源平争亂時代から南北朝時代までを含ませることとする。

(2) 展 開

鎌倉時代の文學の展開の跡を見ると、此の時代の頭尾に互つて連綿たる存在を續けたのはただ和歌の一種だけであつた。此の時代に於ける和歌壇の作物を挙げると、まづ源平争亂時代の壽永二年、平家の都落ちから間もなく、藤原俊成が勅を奉じて撰んだのが「千載集」で、これに次いで出たのが、土御門天皇の元久二年に藤原家隆、藤原定家の撰んだ「新古今集」、これで古今集以來の謂はゆる八代集が出来あがり、それから南北朝にかけて「新勅撰」(定家撰)、「續後撰」(爲家撰)、「續古今」(爲家撰)、「續拾遺」(爲氏撰)、「新後撰」(爲世撰)、「玉葉」(爲兼撰)、「續千載」(爲世撰)、「續後拾遺」(爲藤、爲定撰)、「風雅」(花園院御撰)、「新千載」(爲定撰)、「新拾遺」(爲明撰)、「新後拾遺」(爲遠、爲重撰)、「新續古今」(飛鳥井雅世撰)の十三勅撰集が出て、茲に謂はゆる二十一代集が完成した。なほ之に南朝の宗良親王が撰ばれた「新葉集」を加へて、之をも假に勅撰の分にすれば、此の時代に出来上つた勅撰集は、其の數十六篇の多きに達して居る。なほ

之に各々の家集を加へれば、歌も作者も夥しき數に上るであらうが、特色ある二三の歌集と歌人とを除けば——即ち「千載集」が當時の新舊二派の小波瀾に對して小調和を成したのや、「新古今集」が定家の謂はゆる情は新しかれ、詞は古かれの新説を中心として、形式上の技巧變化を盡くさうと試みたのや、「新葉集」に南朝の君臣が慷慨悲涼の感情の現れたのや、實朝の作に萬葉風の丈高き姿の見えるのや、後鳥羽天皇の御製に悲痛な王者的趣味の見えるのや、西行の作に道心と俗情と風流の情との寂しく絡み合つてゐる等を除けば——大抵古今乃至新古今の作風を模倣踏襲して、墮落し、頹敗し、喪神し、横ぞれしたものであつた。従つて此の時代の和歌は、數量に於てこそ初期から末葉に至るまで間斷なく豊かに充實したけれども、質に於てはただ頭尾の兩端に於て見るべきものを有するに過ぎなかつたのである。

思ふに、此の時代の歌人は、和歌をば眞情を自由に抒べ表すものとしないうで、一定の法格に従つて文字を並べるものと思つて居た。従つて法格を教へる師範家といふものが出来て、それが門戸を張つて歌壇の全權を握り、それが示した法格に合はなければ歌でないと信ぜられるやうになつたのである。かくて、和歌は形式の末に走り、殿しい法格に縛られて益々衰へたが、南北朝の頃になつて、和歌の變態とも云ふべき連歌といふものが盛に行はれ出した。連歌の盛に行はれたの

は、一つは世人が三十一文字の單調無趣味に鑿いた爲、一つは徒らに窮屈な法格の束縛を受けな
いで、活きた感想を自由に發表する爲であつた。本來連歌は、和歌の上の句或は下の句を一人が
よみ、残りの句を他人が添加するのであつたが、此の時代に至つては、一首を二人で詠む制限を
破つて二十句、五十句、百句、二百句、五百句とつづく長い連鎖を試みるやうになつた。當時連
歌の名人と稱せられたのは、兼好等と共に和歌壇の四天王と稱せられた頼阿及びその弟子二條良
基等で、良基は、連歌の式を定めて、「菟玖波集」といふ連歌だけの集を作るやうになつた。

此の時代に見るべき文學の出たのは、殆ど初期と末期とに限られて居る。連綿として不斷の存在
をつづけた和歌でも、質から見ればさうであつた。他の種類の文學は尙更さうである。初期に現
れた文學の中で、當代の思潮を代表して時人の情調を具現したものは「保元物語」、「平治物語」、
「源平盛衰記」、「平家物語」等の謂はゆる軍記物、之に次いで「吾妻鏡」である。中にもこの
時代の最大の文學は軍記物であつて、軍記の中心趣味はまづ武士が有りがひなしの境涯から脱し
て、先に自分等を犬馬あしらひした公卿を蹂躪するやうになつた氣味よさ、次いで再び公卿文明
に囚はれて平家の滅亡する哀れさ、次には源氏が平家の覆轍に鑑み、純粹の武人主義、質素主義
によつて武家を興す趣、當時の武人が戦を一つの藝術と思ひ、劍戟の相交る戰場に悠々自適した

趣などを書いた處にある。要するに、軍記は武人の興隆に伴ふ内面苦惱の生活を書いたもので、
其の中に現れたのは概して勝利者の方から見た光明面の時代相であるが、敗北者の側から見た世
の中のみじめさ、哀れさを痛切に描き、時代の暗黒面に對する落伍者の悲觀的時代觀を鮮かに寫
して、軍記と反對の方面に重い地位を占めるものは、鴨長明の「方丈記」である。「方丈記」の中
には戦争に踏み荒された時代の暗い影がよく寫され、世に背いた作者の寂しい心持もよく現れて
居る。

其の他平安朝の流れを追うたものでは、物語類には「苔の衣」、「石清水物語」、「住吉物語」等が
ある。日記には阿佛尼の「十六夜日記」がある。教訓物、逸話集の方面には「十訓抄」、「古今著
聞集」等がある。いづれも多少此の時代の面影を印してはゐるが、大體平安朝の手振りを模倣し
たもので、特にいふべき程のものではない。

又、此の時代の初期に現れた紀行文に源光行の「海道記」と光行の子親行の「東關紀行」とがあ
る。平安朝の柔らかな文體に漢文脈の加はつたもので、丁度物語文學に於ける平家、盛衰記の地
位を占めて居るものである。

南北朝時代に入つて現れためぼしい文學で、不朽の生命のあるのは「太平記」と「徒然草」とで

ある。「太平記」は後醍醐天皇の即位に筆を起して、建武中興及び南北朝争亂の顛末を寫したものである。内容は花々しい戦争や、大義名分に關する記事に満ちてゐて、人の血を涌かす所があり、又後世に偉大な影響を及したものであるけれども、その文學上の價値は到底「平家」などに比較し得べきものではない。「平家」、「盛衰記」等には、平安朝思想と鎌倉思想との絡み合ひ、即ち公卿生活と武人生活、感情本位生活と義理本位生活との交渉に言ふべからざる味はひがあつたが、「太平記」は概して云へば、鎌倉式の一點張り、いひかへれば武人生活、義理生活に偏した一本調子のもとなつた。「平家」に於ては、驕る平家の威勢といひ、西海の没落、幼帝の入水といひ、昇り、降り、共に目の覺めるやうな程度に達して居るけれども、「太平記」に於ては、建武の中興も、新田・楠木の武勳も、足利の成功も、兩朝の和睦も、皆微温的の好い加減な程度に止つて、深刻な同情を喚び起すべきところがない。「平家」に於ては記事に一種の趣味があつて、戦争にも人情の味はひが絡んでゐたが、「太平記」においては、記事に油氣がなく、戦争は張良孔明的な詭計の筋の變化や、荒つばい腕力の挑みあひを寫すやうになつて、事件本位、輪廓本位となつて來た。「平家」に於ては事が單純で掴まへ易く、事件の進みが急劇に而も漸層をなして最後の大悲劇を現したが、「太平記」に於ては事件が複雑無中心にして、同じやうな小事件が廣い場面に撒布せ

られ、而もその事件がのろ／＼と開展して最後は龍頭蛇尾に終つて居る。従つて「太平記」は、稀有の大事件を描いた點と、武勇義理一點張りの時代、國民を描き得た點と、國民の實際活動に大影響を及した點とを除けば、新趣味を發揮した點に於ても、文體を完成した點に於ても、到底鎌倉の初期に現れた「平家」其他の軍記と比較し得べきものではないのである。

「徒然草」の文章は、平安朝風の磨き上げたもので、その圓熟して品位ある點に於ては、恐らく鎌倉室町の四百餘年間に於ける隨一と思はれる。新味と雋銳な趣味とに於ては、遙かに「枕の草子」に及ばないけれども、兼好といふ洒脫無碍なる暢氣法師の人格と、戦亂に揉まれて捨身になつた時代の影との現れた點に於て、盡きない妙味と非凡な價値とがある。

南北朝時代に出た文學で、なほ其の名を擧げなければならぬのは、北畠親房の「神皇正統記」である。これはあの時代の特殊な思想の發露したものと見ても面白く、文明史の魁をなしたものと見ても面白く、又その文體が強くしつかりして直截明晰に、著しく近代的になつて、後世の普通文、論文の基礎を成した點に於ても注意すべきものである。

要するに、此の時代を代表すべき作物は、前期に於ては軍記四篇に「方丈記」に、西行の「山家集」に「新古今集」に、實朝の「金槐集」、後期に於ては「太平記」に「徒然草」である。

(3) 特質

鎌倉時代文學の特質として先づ挙げなければならないのは、その武士的精神である。武士階級は此の時代に入つて初めて文學に關係する事となつた。即ち彼等の生活が初めて文學の素材となり、又彼等は初めて文學の創作をし、これを鑑賞する事となつた。この意味に於て彼等は當代文學に於ける新興階級であり、隨つて彼等の生活を支配して居た所謂武士的精神は、そのままこの時代の文學の特質の一つとなつてゐるのである。即ち平安時代の文學が概して情趣的、靜的、曲線的、女性的であつたのに對して、この時代の文學は寧ろ意欲的、動的、直線的、男性的である。又、武士的精神は新興の精神であるだけに、前代の既に完成した、ものあはれなどに比べれば、生氣潑刺としてゐる代りに、半面には又生硬素朴を免かれないのである。

前代を繼承した和歌や物語も、最初はかうした精神と全然没交渉に、王朝時代の回顧模倣に没頭してゐたのであるが、當代の後半に於ては公卿自身も干戈を執るか、でなくともその生活は著しく武士化して來た結果、これ等の文學も、王朝式物語からお伽草子風の小説が生まれ、和歌から連歌、連歌から俳諧が生ずるといふ風に、この精神によつて轉化更生の道を辿つて行つた。

次に武士的精神と並んでこの時代の文學のもう一つの特徴はその佛教思想である。

佛教は平安時代に於ても文化の一方の指導者であつて、文學とも緊密な關係にあつたのであるが、しかし文學を本質的に動かしてゐたとはいはれなかつた。それは單に味をつけ、色を染めてゐる以上には出なかつたのである。ところが鎌倉時代になれば、佛教は最早文學の底の底まで滲み渡つた感がある。平家物語を説教物語にしてしまふことは出来ないが、しかし源氏物語を佛理體現の物語とする説などは違つて、平家物語と佛教との關係は遙かに緊密且つ本質的なものとなつてゐるのである。同様のことは和歌、連歌、或は室町時代に入つてからの謡曲などにも言ひ得ることである。謂はば佛教は中世文學の骨髓に徹して居るのである。

以上要するに、武士的精神と佛教思想とは、この時代の文學を支持する大きな二つの力であつて、當代文學はこの二つの力によつて新しい生命と形象とを賦與せられ、ここに特色のある文學を形成することが出來たし、又崩壊枯渴を免かれて、近世文學へ連なつて行く事が出來たのである。

第二部 鎌倉時代文學各説

第一章 平家物語

(1) 時代の背景

當代の文學を代表するものは所謂軍記物語であつて、普通軍記物語と稱せられるものには保元物語、平治物語、源平盛衰記、平家物語の四篇があるが、この四篇を更に代表するものは平家物語である。即ち平家物語一篇を解説することによつて軍記物語全體の特質を知ることが得ると信ずる故、本書に於ては平家物語に就いてのみ解説することとする。但し作の本論に入るに先だつて、吾々はまづ此の時代の大勢を知り、その背景を考へなければならぬ。

藤原氏中心の公卿殿上人等が平安朝の極盛期以來虚位を擁して風流を擅にした因果は觀面であつて、源平争亂時代に入るや、忽ち目も當てられない悲惨な運命に遭遇した。彼等は日に日に文弱になりながらも權力を得ようとして頻りに陰謀を回らしたが、その陰謀毎に頼みとするのは武人の力であつた。武人は力をもつてゐながらまだ自覺しないで殿上人を羨み尊んでゐたのであるが、彼等の實力は次第に加はり、その地盤はいよ／＼固くなつて來た。そのうち同族の権力争ひが昂する中に、皇家にも實權回收を謀られる御方が出でさせられて、その便りにし給ふのも同じく武人であつたので、この方面でも事ある毎に彼等の勢力は増して來たのである。四百年の優柔なる生活は藤氏一門をすつかり去勢して、無骨軟弱の優柔男子と化してしまつた。此の優柔男子が武人といふ眠れる獅子の背上に跨がつて居たのが保元前後の大勢である。

しかし間もなく引き續いて起つた戦争はこの恐るべき獅子の眠りを覺ました。武人自覺の第一聲は「只今の除目物騒なり、人々は何にもなり給へ、爲朝は今日の藏人と呼ばれて何かせむ、ただ元の鎮西八郎にて候はむ」と廣言した爲朝の言葉である。武人自覺の第二聲は「世も靜まりてこそ大國も小國も官位階も進め侍らぬ、見えたることもなきに、かねてなりて何かせむ。只だ義平は東國にて呼びつけられて候へば、元の惡源太にて候はむ」といつた義平の言葉である。義朝が

信賴の怯懦に呆れて、日本一の不覺人と罵つて、鞭を以てその頬を打つたのが第三の自覺である。そして清盛は背上の生きた雛人形を振り落した。ここに於て眠れる獅子は全く自覺めたのである。更に頼朝に至つて、彼等をば雛壇の上に飾つて置くこととしたのである。これが平安奠都より三百九十二年目、保元の亂より三十一年目の文治二年であつて、ここに武人本位の制度が成立したのである。

しかし一たび自覺した武人も、舊思想の絆まじを脱して其の本領を維持し發揮するのは容易な事ではなかつた。清盛は一たび武人の實力を自覺したが、彼及び彼の一門は、實權を握るや、やがて實力を捨てて華やかな虚位を取つた。即ち彼等は藤原氏を羨み、平安朝の文化に眩惑されたのである。この平家と同様な徑路を短日月の間に繰り返したのは義仲であつた。そして頼朝はその後に起り、彼等の失敗に鑑みて、あくまで實力本位の武家氣質を持し、新に武家制度を創めて、よく守り、よく固め、よく制したのであつた。

源平争亂時代の歴史を讀めば、そこに我々は、平安朝の公卿文明が日々に衰へながらも次の代の文明に痕跡を止めようとしてゐる敗者の悲しい努力と、鎌倉の武家文明が藤氏の文明に名残りを惜しみ、未練を残しながら、遂に之を振り捨てて自立する勝者の悲しい努力との現れて居るのを見ることが出来るが、その著しく具體的に現れたのが保元、平治、平家、盛衰記の軍記物語であつて、殊に此の深い悲哀の情調が全篇に浸み渡つて人を動かすのが平家物語である。平家三十年の歴史は藤氏數百年の盛衰の縮寫であるが、新興勝利者の平家が舊時代生活の模倣に亡んで、源氏といふ新文明建設者の勃興を見送る哀音を寫したものが平家物語である。

(2) 國民文學としての平家物語

先づ平家物語と時代の背景に就いて述べたが、次に軍記物語に關する概念的な知識を明確にするために國民文學としての平家物語に就いて一言したい。

ここにいふ國民文學とは國民的特色を發揮した文學の意味である。勿論一國の文學は、その國民の性情、思想の結晶であり、その時代の所産である。個人に個性があるやうに各國民には各々他と異なる國民の感情、思想がある。従つて文學には、同じく人生を表現したものでありながら、或は最もよく作者の個性を發揮したのもあり、或は國民性の表現が特に顯著なものもある。

我が國文學史を通觀すれば文藝の花は色とりどりであるが、その國民的特色を發揮した點に於ては、平家物語を初めとして軍記物語の如きは、第一に指を屈すべきものである。それはいろく

の點からいふことが出来るのであるが、右に述べる諸點が主要條件である。

一、物語の成立が國民的であること。

一般の文學的作物は、大抵、或個人によつて製作せられ、作者も製作年代も、凡そ一定してゐるが、軍記物語にあつては、それが一定してゐない。

軍記物語には、原本から派生して、夥しい異本が出来て居り、物語の組織にしても、内容にしても、著しく成長し、發達變遷をしてゐる。我が國の文學的作品には、異本を派生してゐる例は他に幾らもあり、殊に、この現象は、近古時代に於て著しいやうであるが、軍記物語ほど、異本の數が多くて、而も、その體裁や内容の上に相違の甚だしいものは他に類がない。今日まで知り得たものだけについて言つて見ても、

保元物語に約二十四

平治物語に約二十二

平家物語に約八十八

ほどもあるのである。従つて、物語の作者に擬せらるる者も、自然と多數あらはれ、製作年代に ついても、異説が續出するといふ有様である。

しからば、かかる現象は何を物語るかといへば、それは、取りも直さず軍記物語が、多數の國民により、共同的にはぐくみ育てられて、國民の好尚に適するやうに成長發達し、最も廣く國民の間に普及し、愛讀せられたのであるといふことを證明してゐるのである。

二、樂器に和して語られ國民の共感共鳴を一層深くしたること。

軍記物語は、國民の間に廣く愛讀せられたばかりでなく、琵琶に合はせて語られてゐるから、その内容は、ますます廣く國民の間に紹介せられ、而も、音樂的の演奏によつて、いよく感銘を深くし、國民のこの物語に對する共鳴共感の度を加へたことは争はれない。

平家物語が、文學としてのみならず、平曲として、音樂史上、重要な地位を占めるものであることは、今更いふまでもないことであるが、平治物語の如きも、琵琶に合はせて語られてゐる(花園院宸記、元應三年四月十六日の條の記事に確證がある)。保元物語の方は、語られたといふ明證はないけれども、平治物語と、體裁も組織も内容も似寄つてゐる姉妹篇のことであるから、恐らくは、これも亦、語られてゐたことと思はれる。但し、保元・平治物語などは、平家物語に比べると、劇的・詩的の分子が乏しくて、時人の感興を惹くことが少かつたので、それが語られたのも一時的で終り、獨り、平曲だけが、異常な盛行を見るに至つたものと思はれる。

三、物語の内容が最もよく國民性情を發揮してゐること。

王朝の末、勃發した劃時代的動亂に革新せられて、時代の相^{すがた}や思潮が推移するにつれ、時人が、自己の本領を自覺し、新人生觀・新道德を樹立して、

尊王忠君、祖先崇拜、家名尊重、尙武任俠、自然鍾愛

といふやうな、我が國民に固有な性情を發揮してゐることが著しく、國民的色彩が全篇に漲つてゐる。

しかも軍記物語は、合戦を主題として、その内に活動する人物にも武士が多いから、自然と、武士的精神等が發揮せられて、國民性情の濃厚な發露を見るに至つたものである。

四、物語の結構脚色が著しく國民的であること。

軍記物語は、固より、歴史上の事實を主材としてゐる。そして、これには、史實をそのまま敘説してゐるところも少くないけれども、又、少からざる空想を加へて、面白く劇的に腹案脚色してゐるところが多い。それにまた、多量の傳說的要素を配合して、小説的・詩的の分子を、いよゝ追加してゐる。そして、その結構は、著しく國民的となり、人物の性格行動の如きも類型的となつて、國民的英雄の面目を發揮してゐる。それで、源爲朝にしても、平重盛にしても、源義

經にしても、軍記物語に於ては、實在した人物よりは、理想的の性格が遙かに多く附加されて、國民的色彩が濃厚になつてゐるのである。又、事件の發動や局面の展開なども、國民劇的に仕組まれてゐるところが多くて、至るところに、國民的思想・國民的信仰・國民的趣味等がにじみ出てゐるのを看取することが出来る。

五、表現の形式が國民の讀誦に適應してゐること。

王朝時代の文學的作物には、藝術的價値のすぐれて、不朽の生命を藏してゐるものが少くないのであるけれども、それ等の作物の表現形式は、餘りに貴族的であり、女性的であり、古雅であり、優柔であり、難解であつて、一般國民に取つては頗る耳遠いものであつた。従つて、それが立派なものである割合には、國民の間に普及しなかつた。

然るに、軍記物語の表現過程は、近代的の形式による和漢混淆文で、描寫の仕方も、剛柔、その宜しきを得て、而も聲調がよく整うて諧律に富み、流麗暢達で頗る國民の讀誦に適應してゐる。これがまた、讀者を惹きつける有力な事情となつて、廣く國民の間に愛誦せらるることとなり、大いにその普及を促したのである。

以上挙げた諸點が、平家物語即ち軍記物語が國民的文學である主要條件であるか、かういふ風に

平家物語は、我が國民に最も因縁の深い文學であるから、その缺點があるにも拘らず、今後も、我が國民に永く愛讀されて、不朽の生命を保つて行くことが出来ると思ふのである。

(3) 作者及び成立時代

今述べた如く平家物語の作者及び成立年代は、いろ／＼の説があつて一定しない。しかし作者に就いては信濃前司行長であらうといふ推定が最も穩當であると思はれてゐる。それは徒然草のうち、

『行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて語らせけり。』

とあるのによるのであるが、他に「醍醐雜抄」その他には別に作者を挙げ、種々の説をなしてゐる。即ち「醍醐雜抄」では行長の従弟で同時代の葉室時長を挙げ、更に光行説、資經説等があるのである。従つて、行長の手に成つたといふことも亦正確と認め難い。唯、比較的に時代が合ふといふ迄で、元久詩歌合の詩の作者といはれた行長が、先づ平家物語の原作者に近く、他に挙げられた人々は補筆を執つたのであらうと思惟せられてゐる。

事實、平家物語は、一人の作者の手に成つたものでない。「保元」、「平治」にも二十餘種の異本が

あるが、平家物語は八十八種あるといはれてゐる。それらの異本を作成したものが、一々作者として數へられるとすると、いろ／＼の説が出てくるわけで、勢ひ原作者さへも不明になる。さういふ次第で、はじめに出來た「平家」は、現在の校定本にくらべると、ずつと形の變つたものであつたらうと思はれる。少くとも、詞句・文致などの點に於て、大分單純なものでなかつたらうかと推測されるし、挿話なども次第に付け加へられたのであらうと考へられる。以上の意味では種々の作者の合作だと見るのが至當であらう。

次に執筆者としての資格上から作者の人物を想像して見ると、(一)武士のうちで文事で通じたものか、(二)僧侶中、武家に接近したものか、或は(三)公卿中、武家に親密の關係があつたものか、そのいづれかの手になつたものであらう。戦争のことは、多少専門的知識を要するので、その方面にいくらか通じたものでなくては書けない。が、軍事の専門的知識だけあつても、文藻、學問が相當になくは、やはり表現技巧の上に困る。それ故、右に挙げた三種のうち、いづれかに屬する人が「平家」原本の筆を執つたのであらうと推測される。勿論、最初からどの程度まで編次、音節が整つてゐたか、詞句の具合もどうであつたか、それらは明白に判じかねる。そして平曲としてのリズムを整へる上では、生佛などといふ法師の力が與つて多かつたらうと思はれる。

次に製作年代に就いてであるが、既に作者が明白でない以上、その著作年代も亦分明しないが、今日、ある學者の説によると、「平家」が先づ成り、次に「保元」「平治」及び「源平盛衰記」が成つたと観るのが正しいとするやうである。が、又他の學者の説によると、「保元」「平治」が、「平家」よりも少しく先に出て、「盛衰記」は、「平家」原本よりも後に出たとするのが穩當だともいふ。以上の二説に於て一致せる點は、「源平盛衰記」が、「平家」原本よりも後に出て、材を「平家」に採つたといふことであるが、「保元」「平治」の年代については一致しない。然し、その内容が源氏賞揚に傾き、平家を貶してゐるのを見ると、鎌倉初期になつたものらしく、それよりも遅れたとしても、源家三代の間に書かれたことだけは確かだと思はれる。

それから「平家」の原本が、「保元」「平治」に先だつたといふことは、確證なく、唯文體上「平治」などが「平家」を模倣したらしいといふところから來てゐる。ともかく、「平家」の年代は近頃學者間に於て、建保頃から承久頃に互つて作成せられたらしいと推定されてゐる。蓋しそれは、「平家」の終末に收められてゐる建禮門院の薨去が、建保元年頃らしいから、その後を書いたといふのである。これとても、建禮門院の薨去が貞應年間だといふ説もあつて、さうなると、承久以後に「平家」が出來たこととなる。

結局、作者も年代も、はつきりわからず、唯それらが鎌倉時代の作品だといふことだけが確定したにすぎないこととなるのである。

(4) 構 想

軍記物語の結構は、短い幾つかの説話を追敘的に並べて、それを主想によつて統一するやうになつてゐるが、平家物語も亦かういふ風に仕組まれてゐる。そして時代を経るにつれて、説話は次第に追加せられて成長發達してゐるので、物語の編次・内容にもいろいろ異同變遷を生じ、多數の異本を續出した譯である。

物語全篇の主材は、源平の争亂であるけれども、平家一門の興亡榮枯が敘事的主流をなして居り、而もその没落破滅を敘してゐるところに眼目があつて、一篇の大團圓をなしてゐる。それで、物語に於ては、源氏の一族は、シテたる平氏に對して、ワキの役を演じて居り、藤原氏及び南都北嶺等の勢力團を點出してゐるのも、中心敘事の進展を補助するワキツレの役を勤めてゐるに過ぎない。

平家一門の中で大立物は清盛と重盛とであるが、清盛は暴慢無道で魔王の威を振ひながら社會の

秩序を破壊し、一族の運命を破壊の淵へ導くに對して、重盛は温厚篤實で義理人情を辨へ、明識と仁徳とを以て世を救ひ、父を諫め、將に倒れんとする一門の運命を一手に支へたやうにしてゐるのは、作者が苦心して施した創作的の構想であつて、物語一篇に戲曲的變化と興趣とを與へてゐることが頗る多大である。

平家一門の没落破滅は、その軟化去勢が與つて力あるのは勿論であるが、清盛の無道暴慢が神佛の冥罰を蒙り、天下人心の離反を招いた結果であるとして、そこに因果の理を含め、又一面に於て、本篇の主人公たる平家一門に對して讀者の同情を失はせないやうにする爲や、暴慢無道な清盛との對比によつて、變化と興趣とを齎さんが爲に、重盛を特に温良賢明にして識見徳操のすぐれた哲人君子として理想化してゐる形跡が明らかである。

忠盛や六代などは、源平の鬪戦には重要な地位を占める人物ではないけれども、忠盛は平氏興隆の基礎を築いた功勞者であり、六代は平氏の嫡流たる最後の公達であるから、平家一門の興亡を敘するに當つては、當然、首尾の兩端に立つべき人物である。従つて、本書に於ては、忠盛が堂上貴族の重壓を反撥して牢乎たる地盤を築きあげることに筆を起して平氏興隆の過程を明らかにし、六代斬られに筆を擱いて、一門滅亡の最後の頁を閉ぢてゐるのは、首尾一貫、前後照應、頗

る結構の宜しきを得てゐるものとはいはなければならない。

宗盛は、本來有能な人物ではなかつたやうであるけれども、物語に於ては、殊更に庸劣な人物のやうに寫し、これも重盛の賢明俊英な人格と對照し、興趣を添へんとしてゐる趣向が認められる。

その他、忠度・知盛・教經・經正・維盛・重衡・敦盛以下、一門の人々の性格言動も、それごとりとどりに光彩を放つてゐる。

源氏の側では、總帥頼朝は鎌倉にあつて、黒幕として隠然權威を振つてゐるだけであり、範頼は無能無爲で義經の引立役をつとめてゐるに過ぎない。目ぼしい活躍をしてゐる人物は、初期に頼政があるけれども、一舉にして敗亡し、中期に義仲があり、平家を都から追ひ落して旭將軍の盛名を博したけれども、粗暴な野性が禍して頼朝（實は義經）の爲に滅されてしまつた。義經は義仲討滅に先づ殊勳を樹て、神謀奇略を以て頻りに平家を追撃して、遂に壇の浦に追ひつめてこれを討滅し、源氏第一の花形役者として、その活躍は頗る花々しいものがある。

この他、傑僧文覺に、強烈な蠻勇俠氣と偉大な神通力とを與へ、隨處に活動せしめ、敘事の發展に少からざる變化と興趣とを與へてゐることや、藤原氏の一團や南都・北嶺・三井寺等の宗教的

勢力團を配して、物語の事相を一層複雑にし、局面に波瀾曲折を生ぜしめてゐる點などについても、全篇劇化の上に周到な創作的用意が施されてゐるのが看取される。

又、重要な人物の運命や重大な事件の發生等を豫言的な筆法により、豫め伏線を描いて、次第に本筋に進めるとか、因果の理法によつて人物の運命や事件を解決して行くやうな結構も所々に應用せられてゐる。

尙、灌頂の巻は、平曲傳授上の都合から分立せられたものであるけれども、長い間かういふ體裁に置かれて、一種の傳統的な姿勢を構成してゐる上、その内容が建禮門院に關する、あはれに、痛ましく、優しい記事であり、而も、それが篇中屈指の佳章となつてゐるので、自然とそこに深奥幽玄高雅な特殊な威嚴と興趣とが醸成せられてゐる。

源平の争亂は、形の上では源平兩武家同士の對抗争闘であるけれども、平氏は藤原氏の轍を履んで貴族化してゐるので、實は堂上家と武家との葛藤、文と武との勝負、舊思想と新思想とが交代し、混淆する發作であり、平家一門は、平安朝と鎌倉時代とを劃する分水線であつて、この過渡期の犠牲となつたものである。

一門相揃うて九天の上に昇り、二十餘年の間、權勢の實柄を握り、常春の行樂を追うて、榮耀榮

華の限りをつくし、やがてまた奈落の底に墜ち、眷族を擧げて壇の浦の水屑と消え果てた始終は、豪華・絢爛・悲壯・哀絶の極みであつて、事實そのままが絶好の運命悲劇をなしてゐる。それに、物語の作者は多分に空想を配して一層それを詩化し劇化してゐるので、運命の力に引き摺られ、榮枯常なく、盛衰掌を反すやうな、哀れにはかなく痛ましい人生の相が、一層劇的に興味深く、力強く表現せられてゐる。そしてかういふ過程は、ただに中心的敘事を形成せる平家一門の上に於てばかりでなく、それを助成してゐる幾多の小事相の上にも見られるのである。

鹿谷の密謀露顯によつて、配所に哀れな最期を遂げた成親や俊寛の境涯は、悲痛なる運命悲劇の序幕として先づ凄慘な感をそそるが、平家討伐の魁をして宇治川畔の埋木と朽ち果てた頼政、一氣に平家を都から追ひ落し旭將軍と謳はれる間もなく、粟津が原の露と消え失せた義仲、義仲を一擧に屠つてから、矢繼早に平家を追撃して全滅せしめ、鬼將軍の威望を撞にしながら、兄頼朝に忌まれて身を寄するに處なくして奥州に落ちのび、高館の烟となつて空しく散つた義經など、とり／＼に哀絶なる悲響を傳へて坐ろに涙を催さしめるものがある。

その他、傑僧文覺の流難、さては祇王・祇女・佛御前の間に纏はる榮枯の因縁、葵前・小督局の艶に哀れなる境涯、時頼と横笛とを永遠に隔てた悲戀の宿世など、すべて、運命の手に翻弄せら

れて、痛ましい徑路を辿つてゐるものである。此等は、何れも平家一門の運命をさながら縮圖にしたものである。

従つて、本書の冒頭に、

『祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。』

といつてゐるのは、實に全篇を貫いてゐる主想を標榜してゐるものであつて、これを發端に提示し、一篇の歸趣を明らかにしてゐるものといはなければならぬ。

かうして、作者は人生の痛ましく哀れな相に對して満腔の同情を寄せ、感慨の涙を濺ぎつつ筆を運んでゐる。

(5) 悲哀美

國民的敘事詩としての平家物語が不朽の生命を保つ所以は何處にあるか、その要素を考へて見ると、先づ第一に擧げなければならぬのは運命悲劇としての悲哀美である。

平家一門の榮枯盛衰はまことに朝顔の花のやうにはかなかつた。清盛の存生中は、飛ぶ鳥をも落とすばかりの勢であつたが、清盛卒去の後は榮枯、所をかへて忽ち凋落してしまつた。この脆い、はかない運命が我々を動かすのである。前節に於ても述べた通り、平家物語には、平家の運命を壓縮したやうな幾多の物語があつて、本筋を引き立たせ、この物語に稀有の興味と情調とを與へてゐる。岐王も西光も成親も俊寛も義仲も義經も、皆平家の榮枯を縮めて小形に現したもので、平家物語は、是等を基礎として、背景として、人生の悲哀を歌つたものと見られる。

祇王ははかない白拍子である。それが清盛の寵を得ると、忽ち時人羨望の焦點となつた。

『……入道相國最愛せられければ、是によつて妹の祇女をも世の人もてなす事なのめならず。母とちにもよき屋つくつてとらせ、毎月百石百貫をおくらければ、家内富貴してたのしい事なのめならず。……羨む者共は「あなめでたの祇王御前が幸や。おなじあそび女とならば、誰もみなあの様でこそありたけれ。いかさまは祇といふ文字を名についでかくはめでたきやらん。いざ我等もついて見む。」とて或は祇一と付き、祇二と付き、或は祇福祇徳などいふ者も有けり。……』

そこへ或日清盛に謁を願つた白拍子があつた。名を佛といふ。清盛は大いに怒つて「祇王があら

ん處へは神ともいへ、佛ともいへ、かなふまじきぞ。とう／＼罷出よ。」とて追ひ返さうとしたが、祇王の情ある勧めによつて、對面して見、歌はして見、舞はせて見て、忽ち祇王を佛に見替へ、即座に祇王に暇を出して追ひ拂つた。仕送りの百石百貫は忽ち差しとめられた。程經て召し出だされて敵の佛を慰めんが爲に歌はせられ、舞はせられた。重ね／＼の憂き目に胸迫つて身を投げようとしたが、母にすがり止められて死ぬことすらが思ふに任せぬ。

「……かくて都にあるならば、又うき目をも見むらん。今は都の外へ出でん。」とて祇王二十一にて尼になり、嵯峨野の奥なる山里に柴の庵をひきむすび念佛してこそ居たりけれ。妹の祇女も「姉身を投げば、我も共に身を投げんところ契りしか、まして世を厭はむに誰かは劣るべき。」とて十九にて様をかへ、姉と一所に籠居て後世を願ふぞあはれなる。母とぢ是をみて若き娘どもだに様を替る世中に年老い衰へたる母白髪をつけても何にかはせむとて四十五にて髪を剃り、二人の娘諸共に向専修に念佛して、ひとへに後世をぞ願ひける。

かくて春過ぎ夏闌ぬ、秋の初風吹きぬれば、星合の空をながめつゝ、天のと渡る梶の葉に思ふ事かく比なれや。夕日の影の西の山の端に隠るゝを見ても、日の入給ふ所は西方淨土にてあんなり。いつか我等も彼處に生れて物を思はずぐさんずらんと、かゝるにつけても過ぎにし方の憂き事ども思ひ續けて、たゞ盡せぬ物は涙なり。黄昏時も過ぎぬれば、竹の編戸を閉ぢ塞ぎ、燈かすかにかきたてて、親子三人念佛して居たる處に、竹の編戸を、ほと／＼と打ちたゞく者出できたり。……』

魔縁かと膽を消して出て見ると思ひもかけぬ佛御前である。「……年の若きを憑むべきにあらず。老少不定のさかひ、出づる息の入るをも待つべからず、かげろふ稻妻よりも猶はかなし。一旦の樂に誇りて、後世を知らざらんことの悲しさに、今朝まぎれ出でて、かくなりてこそ参りたれ。」とて、かつぎたる衣を打ちのけたるを見れば、尼になつてぞ出できたる。「かやうに様をかへて参りたれば、日比の科をば許し給へ、許さんと仰せられれば、諸共に念佛して、一蓮の身とならん。」といふ。かうして彼等は四人一所に朝夕佛前に向ひ、花香を供へて他念なく行ひすました。

祇王一家の榮枯は、平家が保元平治より清盛の世盛りを經て、都を落ち、一ノ谷を落ちて壇の浦に滅びた運命を、其のまま縮寫したやうなものである。母刀自の剃髮、佛御前の訪れは、二位尼の入水、大原御幸を其のままそつくりである。祇王の一挿話は平家全體の運命を象徴し、又此の物語の一部として全體の調子を高めて居るものである。

成親の榮枯も同じことで、平家物語に其の流さるる折を寫して、

「(大納言)「……同う失はるべくば、都近き此邊にてもあれかし。」と宣けるぞ責ての事なる。」

近う副たる武士を「誰そ」と問給へば、難波次郎經遠と申す。「若此邊に我方様の者やある。舟に乗ぬ先に言置べき事あり。尋て參せよ。」と宣ひければ、其邊をはしりまはて尋けれど、我こそ大納言殿の御方と云者一人もなし。「我世なりし時は、随ひついたりし者共、一、二千人も有つらん。今は餘所にてだにも此有様を見送る者の無りける悲さよ。」と泣れければ、猛き武士共もみな袖をぞぬらしける。身に添ふ物とはたゞつきせぬ涙計也。熊野詣、天王寺詣などには、二瓦の三棟に造たる舟に乗り、次の舟二三十艘漕つゞけてこそ有しに、今は怪かるかきすゑ屋形舟に、大幕引せ、見もなれぬ兵共に具せられて今日を限に都を出て、浪路遙に赴れけん心中、推量られて哀なり。……」

かうして配所に着いて間もなく出家し、遂にたばかつて殺されてしまつた。「酒に毒を入れてすめたりけれども叶はざりければ、岸の二丈許有ける下にひしを植て、上より突落し奉れば、ひしに貫かて失給ぬ。」前の榮華に引きかへて悲惨なる最期の有様、これ亦平家没落の大筋を活かす

べき同調の小話である。

「昔は法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の庄務を司りしかば、棟門平門の内に、四五百人の所從眷屬に圍繞せられ、鬼界が島に流されては、「蜻蛉などの様に瘦衰へたる者一人よろぼひ出來り。本は法師にて有けりと覺て、髪は虚様に生あがり、萬の藻屑取附て、荊を戴たるが如し。節見れて皮ゆたひ、身に著たる物は絹、布の分も見えず。片手には荒海布を拾ひ持ち、片手には網人に魚を貰て持ち、歩む様にはしけれ共、はかも行かず、よろくと」出て來て、都から遙々尋ねて來た有王に地獄の餓鬼かと怪しまれた俊寛僧都の榮枯の激變は特に繰り返す必要がない。義仲が俱利迦羅おとしの奇捷から都を乗つ取るまでの迅速な成功と、宇治川に破れてから粟津に討死する迄の慌しい没落とは、これ亦平家の運命を縮寫し豫示した趣がある。義經が疾風枯葉を捲く勢で平家を滅す、やがて頼朝の忌諱に觸れて身を置くに所なく、漸く奥州に下つて高館の露と消えたのも亦、平家と興亡の跡を同じくして居る。

そして「平家」の描き出だした悲哀の最高調は二位の尼、主上を抱いて入水する一節である。

「……二位殿は此有様を御覽じて日比思食設けたる事なれば、にぶ色の二衣打覆き、練袴の傍高く挟み、神璽を脇に挟み、寶劍を腰にさし、主上を抱奉て、「我身は女なりとも、敵

の手にはかゝるまじ。君の御供に参る也。御志思ひ参せ給はん人々は、急ぎ續き給へ。」とて舟端へ歩み出られけり。主上は今年は八歳に成せ給へども御年の程より遙にねびさせ給ひて、御容美しくあたりも照り輝くばかり也。御ぐし黒う優々として御せなかつぎさせ給へり。あきれたる御様に、「尼せ、我をばいづちへ具してゆかんとするぞ。」と仰ければ、幼き君に向奉り涙を押へて申されけるは「君は未知し召れさぶらはすや。先世の十善戒行の御力に依て、今萬乗の主と生させ給へども、悪縁に引かれて、御運既に盡させ給ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其後西方淨土の來迎に預らむと思食し、西に向はせ給ひて御念佛候ふべし。此國は粟散邊地とて、心憂き境にてさぶらへば、極樂淨土とてめでたき處へ具し参せさぶらふぞ。」と泣々申させ給へば、山鳩色の御衣にびんつら結せ給ひて、御涙におぼれ、小さく美しき御手を合せて先東を伏し拜み、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、其後西に向はせ給ひて、御念佛有しかば、二位殿やがて抱き奉り、「浪のしたにも、都のさぶらふぞ。」と慰奉て千尋の底へぞ入給ふ。悲き哉、無常の春の風、忽に華の御容を散し、無情哉、分段の荒き浪、玉體を沈め奉る。殿をば長生と名付けて長き棲かと定め、門をば不老と號して、老せぬとさしとかきたれども、未だ十歳の内にして、

底の水くづとならせ給ふ。十善帝位の御果報、申すも中々愚なり。……」まことに哀愁の極みである。「悲しき哉、無常の春の風」以下の數句で、平家と平安朝の舊文明とは永久に亡び去つた。我が國古來未だ曾てかくの如き悲壯の曲が無い。そして此の最高調の哀歌は長く尾を曳いて大原御幸に其の餘韻を收めて居る。

「……女院重て申させ給ひけるは、「我平相國の娘として、天子の國母となりしかば、一天四海皆掌のまゝなりき。拜禮の春の始より、色々の衣がへ、佛名の年の暮、攝籙以下の大臣公卿にもてなされし有様、六欲四禪の雲の上にて、八萬の諸天に圍繞せられ候ふらむ様に、百官悉く仰ぬ者や候ひし。清涼紫宸の床の上、玉の簾の中にて持成され、春は南殿の櫻に心をとめて日を暮し、九夏三伏のあつき日は、泉をむすびて心を慰み、秋は雲の上の月を獨見ん事許されず、玄冬素雪の寒き夜は、つまを重ねて暖にす。長生不老の術を願ひ、蓬萊不死の藥を尋ても、唯久しからん事をのみ思へり。明ても、暮れても、樂しみ榮えし事、天上の果報も、是には過じとこそ覺え候ひしか。それに壽永の秋の初、木曾義仲とかやに恐れて、一門の人々住馴し都をば雲井の餘所に顧みて、故郷を燒野の原と打詠め、古は名のみ聞し須磨より明石の浦傳ひ、さすが哀れに覺えて、晝は漫々たる浪路を分て袖を

ぬらし、夜は洲崎の千鳥と共に泣明し、浦々鳥々由ある所を見しかども、故郷の事はわす
 られず。かくて寄る方無しは、五衰必滅の悲とこそおぼえ候しか。人間の事は、愛別離
 苦、怨憎會苦、共に、吾身に知られて候ふ。四苦八苦一として残る所候はず。さても筑前
 國太宰府と云處にて、維義とかやに九國の内をも追出され、山野廣といへども立寄休むべ
 き處なし。同じ秋の末にもなりしかば、昔は九重の雲の上にて見し月を、今は八重の鹽路
 に詠めつゝ、明し暮し候ひし程に、神無月の比ほひ、清經の中將が、都のうちをば源氏が
 爲に責落され、鎮西をば維義が爲に追出さる。網にかゝれる魚の如く、何くへ行かば通る
 べきかは。存へ果べき身にもあらずとて、海に沈み候ひしぞ心憂き事の始めにて候ひし。
 波の上にて日を暮し、船の中にて夜を明し、御つぎ物もなかりしかば、供御を具ふる人も
 なし。適供御は備へんとすれども水なければ参らず。大海に浮ぶといへども、潮なれば
 吞事もなし。是又餓鬼道の苦とこそおぼえ候ひしか。かくて室山水島所々の戦ひに勝しか
 ば、人々、少色なほて見え候ひし程に一谷といふ處にて一門多く滅びし後は直衣束帯を引
 替て、鐵をのべて身に纏ひ、明ても暮ても、軍よばひの聲斷ざりし事修羅の闘諍、帝釋
 の争ひも、かくやとこそおぼえ候ひしか。一谷を攻落されて後、親は子におくれ、妻は夫に

別れ、沖に釣する船をば、敵の船かと肝を消し、遠き松に、群居鷺をば、源氏の旗かと心
 を盡す。……(六道の沙汰)

昔は東に向はせ給ひて「伊勢大神宮、正八幡大菩薩、天子寶算、千秋萬歳。」と申させ給ひ
 しに、今は引かへて、西に向ひ手を合せ「過去聖靈、一佛淨土へ。」と祈らせ給ふこそ悲し
 けれ。御寢所の障子にかうぞ遊されける。

このごろはいつ習ひてかわが心、大官人の戀しかるらん。」

天上の樂しみも地獄の苦しみも、今は回顧の眼に靜かに寂しく映るやうになつた。此の時に至つ
 ても、そゞろに戀しいのは大官人の生活である。もとは武人の娘たる御身が、何時の間にならつ
 ていつの間に公卿生活が戀しくなつたことであらう。あはれ、女院の心は平家一門の心であつた。
 彼等は鴉片中毒者のやうに甘んじて公卿文明の弊に中毒して、死に至るまで公卿文明中毒の甘い
 夢に憧れた。平家の歴史は淋しいけれども甘い。悲痛だけれども酔ひ心地の歴史である。稀有の
 悲劇だけれども、恍惚として夢心地に味はひ得る悲劇である。そして此の悲劇の樞要部を占めて、
 壯快な前曲を奏でたのが清盛、結尾の哀音を奏でたのが清盛の妻二位の尼、最後に此の哀音の餘
 韻の搖曳を奏でて、此の作に千鈞の寂しい落ちつきを與へたのが清盛の女、女院である。

(6) 戦争の美化

悲哀美とともに平家物語の第二の魅力は、戦争の美化といふことである。平家物語と時代の背景は既に前に述べた。源平の争亂を主題とする平家物語は、戦争の文學である。合戦は人生に於ける最も緊張した花々しい活劇である。當時の武人は戦争を生存競争の要件としたばかりでなく、更にこれを一種の美術と考へた。彼等は勝つことを考へると共に、如何にして美しく勝ち、又美しく負くべきかを考へた。平安貴族が戀愛や遊藝に遊んだと同じく彼等は戦ひに遊んだといつてよい。武人が戦ひに遊んだ時代相が、この物語には活ける如く描かれて居るのである。

『凡そ能登守教經の矢先に廻る者こそ無りけれ。矢種の有る程射盡して今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧著て、いか物作りの大太刀拔、白柄の大長刀の鞘をばづし、左右に持て、なぎ廻り給ふに面を合する者ぞなき。多の者ども討たれにけり。新中納言使者を立て、能登痛う罪な作り給ひそ。さりとして好き敵か。』と宣ひければ、「さては大將軍に組めごさんなれ。」と心得て、打物莖短に取て、源氏の船に乗り移り、をめき叫んで責戦ふ。されども判官を見知給はねば、物具の好き武者をば「判官か」と目を懸て、

馳回り給ふ。判官も先に心得て面に立つ様にしけれども、兎かく違ひて、能登殿には組れず。されども如何したりけん、判官の船に乗當て「あはや」と目を懸て飛でかゝるに、判官叶はじと思はれけん、長刀脇にかい挟み、御方の船の二丈ばかりのいたりけるに、ゆらりと飛乗り給ひぬ。能登殿は疾態や劣られけん、やがて續いても飛び給はず。今はかうと思はれければ太刀長刀海へ投入れ、甲も脱で棄られけり。鎧の草摺かなぐり棄て、胴ばかり著て、大重になり、大手を廣げて立たれたり。凡當を撥てぞ見えたりける。怖しなども愚也。能登殿大音聲を上て、「我と思はん者共は寄て教經に組で生捕にせよ。鎌倉へ下て頼朝に逢て物一詞云はんと思ふぞ。よれやよれ。」と宣へども寄る者一人も無りけり。こゝに土佐國の住人、安藝の郷を知行しける安藝大領實康が子に、安藝太郎實光とて、三十人が力持たる大力の剛の者あり。我にちとも劣らぬ郎等一人、弟の次郎も、普通にはすぐれたるしたゝか者也。安藝太郎能登殿を見奉て申けるは、「如何に心猛くましますとも我等三人取付たらんに縦長十丈の鬼なりとも、なか従へざるべき。」とて主従三人小船に乗て、能登殿の船に押並べえいといひて乗移り甲のしころを傾け太刀を抜て一面に打て懸る。能登殿ちとも噪ぎ給はず、眞先に進だる安藝太郎が郎等をすそを合せて、海へどうと蹴入給ふ。續いて

よる安藝太郎を、弓手の脇に取て挟み、弟の次郎をば、馬手の脇にかい挟み、一しめしめて、「いざうれ、さらば己等死出の山の供せよ。」とて、生年廿六にて、海へつとぞ入給ふ。」

此の實戦の描寫が精しくて力が入つて居る趣は、「古事記」の中の戦争の荒つばい敘事や、「將門記」や、前九年、後三年のたど／＼しい戦記などに、絶えて見られなかつたものである。戀愛や優美な風流遊びが平安朝の假名文學に精敘されて初めて立派な文學となつたやうに、戦争は平家物語を初め軍記物語に精敘されて、初めて立派な文學となつた。

平家物語はただ戦ひを精敘した點に於て空前の面白味があるばかりでなく、當時の武士の教養のあつた事や、戦争を美術化した事を寫した點に於ても亦空前の面白味がある。當時の武人は平安朝の公卿文明を倒して新に武家文明を建てたといふものの、猶、舊文明の感化を受けて、物の哀れを知り、風流を解し、愛憐、謙抑の尊い事を解してゐた。そしてこれが一種の嗜みとなつて、本來殺伐であるべき武士の行爲に床しい味はひを添へた。「奥州後三年記」などの記す所を見ると、義家時代の武人には一般に蠻勇殺伐の氣風がある。山櫻の詠があり、連歌の優しさに貞任を許したほどの義家であつて、猶、敵者を殺す事を樂しみにし、我れを罵つた千任に對して「金ばしにて齒をつき破りて、その舌を引き出してこれを斬り」、又千任に主人武衡の首を踏ませて、

「千任が舌を斬りをはりて、縛りかゝめて木の枝につりかけて、足を地につけずして、足の下に武衡が首を置けり。千任泣く／＼足を屈めてそれを踏まず、しばらくありて、力盡きて足を下げて遂に主の首を踏みつ。將軍これを見て郎黨共にいふやう、二年の愁眉けふすでにひらけぬ。」

と喜び、家衡の首を見て「喜びの心骨に徹る」といふ類ひの殘忍な行ひがあつた。源平、鎌倉の武人にも、清盛が西光の口を裂き、ひしを植ゑた穴に突き入れて成親を殺し、或は頼朝が父の仇長田忠致を土礫にし、佐々木盛綱が藤戸の渡しを教へた恩ある漁夫を刺し殺した等の殘忍な所行が無いではないが、彼等の性行は一般に磨き上げられて、優しく美はしく、上品に思ひやりがあるやうになつた。唯武主義の頼朝でもなほ琵琶を立聴きする風流を解し、

「其朝兵衛佐殿折節、持佛堂に法華經讀でおはしける處へ、千手前参りたり。兵衛佐殿うちゑみ給ひて、「千手に中人をば面白もしたるもの哉。」と宣へば、齋院次官親義、折節御前に物かいて候けるが、「何事で候けるやらん。」と申。「あの平家の人々は甲冑弓箭の外は他事なしとこそ日比は思ひたれば、此三位中將(重衡)の琵琶の撥音、口ずさみ、終夜立聞て候に、優にわりなき人にておはしけり。」……(三位の中將の)琵琶の撥音朗詠のやう、後

「までも有難き事ぞ。」と宣ひける。」

我が言をもどき、我が父を誹つた由利の八郎をも優待するの雅量を有つて居た。況んや平家に至つては、重盛の理を解し情に厚かつたのを首めとして、忠度、敦盛、重衡、實盛等の例を擧げるに堪へないほど多くある。そして、當時の武人の是等の嗜みは、平家物語に豊かに面白く描かれてゐる。

戦ひに遊び、戦ひを美術化した事も、また武士の教養と表裏して軍記文學に床しい色彩を帯びさせた。彼等は疊の上のたれ死を武士の恥として、戦亂の間に悠々自適した趣がある。彼等は寧ろ品性を磨かんが爲に、武藝を現さんが爲に、一種の藝術家として陣頭に立つた。生田の森の戦ひに、河原太郎、次郎の兄弟が抜け駆けをした所に、

「河原太郎弟の次郎を呼で云ひけるは「……敵を前に置ながら、矢一つだにも射ずして待居たるが、餘りに心もとなく覺ゆるに、高直は先づ城の中へ紛れ入て、一矢射んと思ふなり。されば千萬が一も生て歸らん事有がたし。わ殿は残り留て、後の證人にたて。」と云ひければ、(弟の)河原次郎涙をはらくと流いて、「口惜い事を宣ふ者哉。唯兄弟二人有る者が兄を討せて、弟が一人残り留またらば、幾程の榮をか保つべき。所々で討れんよりも、

一所でこそ如何にも成らぬ。」とて、下人共呼寄せ、最後の有様妻子の許へ、言遣はし、馬にも乗ず、げををはき、弓杖を突て、生田森の逆茂木を上こえ、城の中へぞ入たりける。

星明りに鎧の毛もさだかならず。河原太郎大音聲を揚て、「武藏國の住人、河原太郎私市高直、同次郎盛直、源氏の大手生田森の先陣ぞや。」とぞ名乗たる。平家の方には是を聞いて、「東國の武士程怖しかりける者はなし。是程の大勢の中へ唯二人入たらば、何程の事をかし出すべき。好好暫し愛せよ。」とて、討んと云ふ者無りけり。是等兄弟は究竟の弓の上手なれば、指詰引詰散々に射る間、「愛しにくし、討や。」と云程こそ有けれ、……同枕に臥にけり。」

といつてゐる。兄弟が、藝を見せようとして舞臺に上るやうな態度も面白ければ、平家方がこれを見て、「只置きて愛せよ」も實に面白い。「愛せよ」の一語が、實によく當時の武人の戦ひに臨む氣持を道破してゐる。

次は宇治川の宮軍に頼政方の筒井の淨妙と一來法師との勇戦を寫したところ。

「堂衆の中に、筒井の淨妙明秀は、褐の直垂に、黒革威の鎧著て、五枚甲の緒をしめ、黒漆の太刀を帶ぎ、二十四差たる黒ほろの矢負ひ、塗籠籐の弓に、好む白柄の大長刀取副て、

橋の上にぞ進んだる。大音聲を揚て名のりけるは「日來は音にも聞きつらむ、今は目にも見給へ。三井寺には其隠れ無し。堂衆の中に筒井淨妙明秀とて、一人當千の兵ぞや。我と思はむ人々は寄合や、見參せむ。」とて、二十四差たる矢を差詰引詰散々に射る。矢庭に十二人射殺して、十一人に手負せられたれば、箆に一つぞ残たる。弓をばからと投捨て、箆も解て捨てけり。つらぬき脱で跳に成り、橋の行柵をさらりと走渡る。人は恐れて渡らねども、淨妙房が心地には、一條二條の大路とこそ振舞たれ。長刀で向ふ敵五人薙ふせ、六人に當る敵に逢て、長刀中より打折て捨てけり。其後太刀を抜て戦ふに、敵は大勢なり、蜘蛛手、角繩、十文字、蜻蜓返り、水車、八方透さず切たりけり。矢庭に八人切ふせ、九人に當る敵が甲の鉢に、餘に強う打當て、目貫の元よりちやうと折れ、くと抜て、河へざぶと入にけり。憑む所は腰刀、偏へに死なんとぞ狂ける。爰に乗圓房阿闍梨慶秀が召使ける一來法師と云ふ大力の早態在けり。續て後に戦ふが、行柵は狭し、側通べき様はなし。淨妙房が甲の手さきに手を置て、「悪う候淨妙房」とて、肩をつんど跳り越てぞ戦ひける。……」

彼等の戦ひに遊んで居る様子が手に取るやうである。

越中前司盛俊は一谷の戦ひに山の手の侍大將であつたが、今は叶はじと思つたか、控へて敵を待つ所に、猪俣小平六則綱が好き敵と目をつけ、鞭鐙を合はせて馳せ來つて、押し並べて、むづと組んで、どうと落ちた。

「猪俣は八箇國に聞えたるしたゝか者也。鹿の角の一二の草かりをば、輒引裂けるとぞ聞えし。越中前司は二三十人が力態をする由人目には見えけれども内々は六七十人して上下す船を、唯一人して押上おし下す程の大力也。されば猪俣を取て抑て働さず。猪俣下に伏ながら刀を抜うとすれども、指はだかて、刀の柄を握にも及ばず。物を言はうとすれども、餘に強う推へられて、聲も出でず、既に頸を搔れんとしけるが、力は劣たれども心は剛なりければ、猪俣すこしもさわがず、暫く息をやすめ、さらぬ體にもてなして申けるは、「抑名乗つるは聞給ひて候か。敵をうつと云ふは、我も名乗て聞せ、敵にも名乗せて、頸を捕たればこそ大功なれ。名も知ぬ頸取ては何にかはし給ふべき。」と云はれて、實もとや思ひけん、「是は本平家の一門たりしが、身不肖なるに依て、當時は侍に成たる越中前司盛俊と云ふ者也。和君は何者ぞ、なれ聞う。」と云ひければ、「武藏國の住人猪俣小平六則綱。」と名乗る。「情此世中の在様を見るに、源氏の御方は強く、平家の御方は負け色に見

えさせ給たり。今は主の世にましまさばこそ、敵の頸取て參せて、勳功勸賞にも預り給め、理を枉て則綱扶け給へ。御邊の一門、何十人も坐せよ。則綱が勳功の賞に申替て、扶け奉らん。」と云ければ、越中前司大に怒て、「盛俊身こそ不肖なれども、さすが平家の一門也。源氏憑うとは思はず。源氏又盛俊に憑れうともよも思はじ。悪い君が申様哉。」とて、やがて頸を搔んとしければ、猪俣「まさなや、降人の頸搔様や候。」越中前司「さらば助けん。」とて引起す。前は畠の様にひあがて、究て固かりけるが、後は水田のこみ深かりける畔の上、二人の者腰打懸て、息續居たり。」

折しもかけつけた一騎の武者は、猪俣に親しい人見の四郎といふ侍で、盛俊は遂に猪俣等の爲に討たれてしまつたのである。味方大敗軍の中に踏み止つて敵を待つ者が、剛敵を組み伏せた手を止めて名乗らせるのも面白く、かかる間にも先づ自ら名乗つて後に敵に名乗らせるのも面白く、我れを助けなば、他日勳功に替へて助命を計らはうと言つたのに怒つて、改めて殺さうとしたのも面白く、降人の首かくやうやあると言はれて直ちに宥して、悠然とうち並んで畔に腰かけたのも面白く、生中助けた爲に自分が殺されて悔いぬのも面白い。彼等は勝つ事よりは寧ろ美しく戦ふこと、武士の嗜みを現す事、侍の面目を發揮する事を考へた。彼等が美しく戦つて死して悔い

ないのは、美術家が名作を成して死して悔いぬのに似て居る。扇の的も、しころ引も、皆當時の武士の此の心意氣の現れたものである。要するに、當時の社會の表面に流行して時人の視聽を集めたものは戦争で、當時の武人は戦争に關係ある武器をも、技術をも、精神をも、いろ／＼に磨き上げ、さまざまに工夫を凝らして、遂にそれを一個の美術とするやうになつた。此の時代の人にも、二三の主將株は天下の平和を目的として、戦争をば平和を致す一時の方便と見て居たであらうし、公卿一流の平安思想繼承者は矢叫びの聲に身ぶるひして居たであらうし、一般人民は無論太平を希うて居たに相違ない。しかしながら一代の花形役者たる武人に取つては、戦争は實に其の心を養ふ糧であつた。彼等は生きんが爲に戦はないで、戦はんが爲に生きた。彼等の平生の修養は戰場に於ける功名の爲である。彼等は普通の時代に於ける普通人が戰慄する戰場を以て一期の花を飾るべき樂園と見做した。そして我が古今の文學の中、此の趣味を最も美はしく、最も面白く描いたものは平家物語を初め四篇の軍記物語である。

(7) 文章

源氏物語を初めとして、平安朝の文章は、優美、艷麗、洗煉等の特色を以て、立派に調和され

て居た。その點に於てははるかに劣るけれども、平安朝の和文脈に漢文脈をとり入れ、所謂和漢混淆體を作り上げて、その内容と調和せしめて成功して居るのが、平家物語の文章である。即ち藝術品としての品格に於ては劣るが、その中に漢語、佛語、雅語、俗語等を自由に豊富に入れ、雄剛勁健な中に、優雅、暢達な趣を宿し、詩的劇的な興趣の豊かな内容と相俟つて、形象美を發揮して、劃期的な成功を収めてゐるのである。

諸行無常の響きを傳へ、盛者必衰の理をあらはす人生の形相を、如實に體現したのが平家一門であり、この大氏族の破滅によつて展開せられた悲壯沈痛なる劇的運命を、血と涙と熱と同情との溢るる靈筆によつて、巧みに描き成したのが實に平家物語であり、而もこれは廣く國民の間に愛讀せられた上に、琵琶に合はせて語られたので、その文章は、文學的にも音樂的にも著しく洗煉せられ、磨きをかけられて、煌々たる白璧の輝きを見せ、琅々たる金玉の響きを成してゐる。

平家物語の文章の第一の長所は、その調子の雄々しい事である。平安朝の文章は優美一方、女々しさ一方であつたが、平家物語の文章はこれに對して新に強き雄々しい調子を立てた。その中の戦争の記事は皆これを證して居るが、尙、一二の例を擧ぐれば、清盛の逝去を寫したところ。

『入道相國、さしも日來はゆゝしげに坐しかども、誠に苦げにて、息の下に宣ひけるは、

「われ保元平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも帝祖太政大臣に至り、榮花子孫に及ぶ。今生の望、一事も残る所なし。但し思置く事とは、伊豆國の流人前右兵衛佐頼朝が頭を見ざりつること安からね。我如何にも成なん後は堂塔をも立て孝養をもすべからず、やがて討手を遣し、頼朝が頭を刎て、我墓の前にかくべし。其ぞ孝養にて有んずる。」と宣ひけるこそ、罪深けれ。

同四日、病に責められ、せめての事に板に水を沃て、其に臥轉給へ共、助る心地もし給はず。悶絶躡地して、遂にあつち死にぞし給ひける。馬車の馳違ふ音天も響き大地も揺ぐほど也。一天の君萬乘の主の、如何なる御事在すとも是には過じとぞ見えし。今年は六十四にぞ成給ふ。老死と云べきにはあらねども、宿運忽に盡給へば、大法祕法の効驗もなく、神明三寶の威光も消え、諸天も擁護し給はず。況や凡慮に於てをや。命に代り身に代らんと忠を存せし數萬の軍旅は、堂上堂下に竝居たれども、是は目にも見えず力にも關らぬ無常の刹鬼をば、暫時も戰返さず。又歸り來ぬ死出の山、三瀬川、黄泉中有の旅の空に、唯一所こそ赴き給ひけぬ。」

句讀短く、而も語句強くて、これが悲痛なる人の臨終を寫した文かと疑はれるほど、平安朝には

到底見ることの出来ない調子である。

又、

『さる程に又後に武者こそ一騎續いたれ。「誰そ。」と問へば「季重」と答ふ。「問ふは誰そ。」「直實ぞかし。」「如何に熊谷殿はいつよりぞ。」「直實は宵よりよ。」とぞ答へける。』

或は、

『(熊谷)「如何に小次郎手負たか。」「さ候。」「常に鎧つきせよ、裏搔すな、鍛を傾よ、内甲射さすな。」とぞ教へる。』

等、掛け合ひの弾んで力のある面白さ。これもまた此の時代の文章に於て初めて見るものである。

これは對話を寫す演劇文の面白さを敘事詩に應用したのもとも見られるのである。平家物語は用語に於ては前述せる平家物語の文章の第二の長所は變化に富んでゐることである。平家物語は用語に於ては前代の美し如く、平安朝傳來の優雅な語に加ふるに、俗語・漢語・佛語を以てし、調子に於ては前代の美しさ弱々しさに加ふるに、強さ雄々しさを以てした。或は其の間に立派な調和が出来上らなかつたにもせよ、平安朝の單調を救つた點に於て独自の面目を發揮したものと云つてよいのである。蓋第三の長所は、音樂的な調子が、全體を一貫して、朗讀し易いやうに出来てゐることである。

し、それは平曲として歌はれるので、勢ひリズムに注意するやうになつたのであらうが、そればかりでなく、平家咏嘆の感情が昂揚すると、自ら至る處に快いリズムを奏するといつたやうな具合にもなつたものと思はれる。いづれにしても、調子の音樂的なことが、平家物語の一特色で、往々七五調を用ゐ、或は對句を用ゐて調子を整へた。「月見」のうちに、

『舊き都は荒行ば、今の都は繁昌す。浅ましかりける夏も過ぎ、秋にも既に成にけり。やうく秋も半に成行ば、福原の新都にまします人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大將の昔の迹を忍つ、須磨より明石の浦傳ひ、淡路のせとを押渡り、繪島が磯の月を見る。』とあるのにも、七五調が多い。それに對句を使用したところも少くない。

『平家知行の國三十餘箇國、既に半國にこえたり。……綺羅充滿して、堂上花の如し。軒騎群集して門前市をなす。揚州の金、荊州の珠、吳郡の綾、蠟江の錦、七珍萬寶一として闕たる事なし。』

といふ類である。

更に第四の特長は、全體に於ける敘事・描寫が、その場、その人に應じて、真相を再現した感を與へるところにある。平家物語の描寫法は平面的よりも寧ろ立體的であり、精描式よりも淡彩式

である。必ずしも、くどくど／＼状景を述べ立てないけれども、印象鮮明、優美の景、豪壯の趣、可憐の状、悲痛な姿など、それ／＼巧みに描き分けられて平板に流れてゐない。以上が平家物語の文章美構成の要素である。

(8) 結 論

感情本位、文藝本位の平安朝は小説に描かれるに適した時代であつた。そして我々は世界に誇ることの出来る「源氏物語」を持つことが出来た。武人の生活を経緯として、壮大な悲劇に満ちた源平時代は敘事詩に歌はれるに適してゐる。しかし我々は不幸にして、世界に誇るべき、例へば「イリアッド」、「ニーベルンゲン・リード」等に比較すべき立派な敘事詩を得ることが出来なかつた。これは甚だ遺憾ではあるが、前代の美の文學に對して力の文學を出だし、大官人の文學に對して武人の文學を出だし、眞摯な筆によつて、この味はひ深い時代を生き／＼と寫した「平家物語」を持つことが出来たのは、せめてもの喜びである。

平家物語は、文學的價値に於て、到底源氏物語には及ばないけれども、我々はそこに、空前絶後の時代の様相を見、後世文學の題材の寶庫を見る事が出来るのである。さういふ點によつて、平家物語は平安朝文學も及ばぬほどの歎稱を博することが出来た。平家物語は決して時代に孤負したものでないといふべきである。

第二章 新古今和歌集

(1) 成立

新古今集が世に出たのは、後鳥羽上皇の歌道御奨励によるところが多い。編者は源通具、藤原有家、同定家、同家隆、同雅經の五人の外に、沙彌寂蓮が加へられてゐたが、寂蓮は事半ばにして歿した。後鳥羽院の院宣の下つたのは、建仁元年十一月三日であつて、本集の草稿の出来上つたのは元久二年三月二十六日の頃と思はれる。

後鳥羽院は、天曆以來、廢れた和歌を復興して、寄人、連署等の役員を置き、選歌及び歌會を掌ることを命ぜられた。更に上皇は千五百番歌合を催して、當時の三十名家に各百首の歌を作らせ、その優劣を定めしめなどして、短歌の進歩に資せられた。上皇は以上の意味に於て歌道中興に最も寄與されたのである。

(2) 歌人

右の如き歌道復興の機運に連れて、種々有力な作家が輩出した。これを上にしては後鳥羽、順徳、土御門の三上皇があらせられ、臣下のうちでは、良經、定家、家隆、雅經、有家、通具、秀能及び具親などの人々が有名であつた。僧侶では西行、寂蓮、慈圓の三人、女流では、式子内親王、宮内卿俊成の女などが數へられる。

本集に多くの歌を入れた作者は、西行(九十四首)、慈圓(九十一首)、良經(七十九首)、式子内親王(四十九首)、定家(四十六首)、家隆(四十二首)、寂蓮(三十五首)、後鳥羽院(三十四首)、俊成女(二十五首)、雅經(二十二首)、有家(十九首)、秀能(十七首)等で、故人では貫之(三十二首)、和泉式部(二十五首)、人麿(二十三首)等が多い。

(3) 歌風・特質

以上、有力な諸作家を有したことは、新古今集に取つて幸ひであつた。蓋し新古今集は、平安末期に出た「千載集」の脈を追うて、そこに示された風韻、風情を重んずる傾向、乃至幽玄の一

路を追ひ求め、一段と工夫・精進によつて、さういふ方面の特色を鮮かに示したのである。

鎌倉時代に於ける有力な歌人は唯新を求めたのみではなかつた。新しい意義を眞の詩味に求めた。皮相の眞、虚飾の眞よりも、内在的眞を主眼とした。そこに彼等の藝術上に於ける立脚地があつた。既にさういふ意味で「千載集」の選者、藤原俊成は幽玄の旨を高調して、「萬葉」、「古今」以外に新しい詩境を作らうとし、その意味を説いて、「大方、歌は必ずしも、をかしきふしを云ひ、事の理りをいひきらむとせざれども、素より詠歌といひて、たゞよみあげたるにも、打詠じたるにも、何となく艶にも幽玄にも開ゆることのあるべし。よき歌にもなりぬれば、その詞の姿のほかに景氣の添ひたるやうなることあるにや。たとへば、春の花のあたりに霞棚びき、秋の月の前に鹿の聲を聞き、桓根の梅に春風の匂ひ、峰の紅葉に時雨の打そゞぎなどするやうなることの浮びて添へるなり。常に申すやうには侍れど、かの月やあらぬ春や昔のといひ、結ぶ手の筆に濁るなどいへる、何となくめでたく聞ゆるなり」と述べた。つまり、それは「古今」の一弊たる理窟に墮した歌を排して、聲調にも内容にも、餘情、餘韻の縹緲たらんことを求めたものである。

俊成の歌論は、素より組織的なものでなく、隨感・隨想の餘滴にすぎないけれども、「幽玄」の標識を掲げて、行き詰つた歌壇に開展の一路を示した事は賞讃に價する。そのあとを承けた藤原定

家になると、「幽玄」の意味を一層、明瞭に説き出した趣が見える。彼は歌に十體あることを説いて、内容、外形、趣向などの上から古來の短歌を十種に分類したが、そのうちに於て、特に「有心體」を高調した。有心體といふのは、「さても此十體の中に、いづれを申すとも、有心體に過ぎるべからず。よくよく心をすまして、その一境に入りふしてこそ、稀にも詠まるゝ事は侍れ。されば、よろしき歌と申し候は、歌ごとに心の深きをぞ申しためる」といふのである。所謂「心の深き」といふは、いろいろに解釋されることで、その言葉の意味の、はつきりしないものが少くない。それで、或人は、それを普遍的理想の義と解したが、寧ろ意義深き歌と解した方が穩當と思はれる。幽玄といふ以上、それが神祕的、哲學的、宗教的なものでなくとも、歌の上に深い意味を含ませ、餘韻、餘情の搖曳せるものたることは論がない。それ故、「心の深き」とは、意味深きものといふ風に解して差支へないと思ふ。即ち内容上、風情あり風韻あることを意味するのである。

これ等の歌論によつて「千載集」の脈が、鎌倉時代に傳はつて、一層、その標識とせられた「幽玄」の意味を高調するに至つた趨勢を察することが出来る。新古今和歌集は、以上のやうな空氣

のうちから生まれ出たのである。従つて、新古今の目ざす點は理窟に墮せず、嫌味に囚はれず、技巧のあらん限り、趣向のあらん限り、力をつくし、深みある詩美を表現しようとするにあつた。そこに「萬葉」にも「古今」にもなき特質が存したのである。

事實、新古今は、その新詩境の開拓に於てほぼ成功した。が、そこに見るのは、豪壯とか、雄麗とか、妖艶とか、艶美とかいふやうな趣には乏しい。その代りに、閑雅あり、清淡あり、幽寂あり、俗にいふ「さび」の趣がある。勿論、宗教的法悦や哲學的深奥などは、餘り見出だすことが出来ないけれども、以上のやうな詩美の領域をひろげたことは、新古今の誇りとすべきところである。

それらと共に、表現形式を引き締め、成るべく複雑な事象を短詩形のうちに讀み込まうとした結果、詞の上に於て助詞を省略して、體言どめとする風を多く生じた。それは、「見わたせば花も紅葉もなかりけり、浦の苫屋の秋の夕ぐれ」(定家)、「行く末は誰しのべとて夕風に、ちぎりかおかん宿のだちばな」(通具)といふ類である。また調子を流暢にする爲、第三の句にて詞をきり、後の俳句の先驅をしたものもある。例へば、「津の國のなにはの春は夢なれや、蘆の枯れ葉に風わたるなり」(西行)、「霜がればそことも見えぬ草の原、誰にとはまし秋の名残を」(俊成女)などの類

である。

その他、倒置法、省略法、擬人法、或は譬喩法、或は對偶法などを自由に活用し、修辭上の技巧に最善の力をつくしたことは、新古今の一特色であつた。

それに「本歌取り」と稱して、名高い名歌を新様に翻案し、藍より出でて藍よりも青き巧みさを見せたことも亦この時代に於ける特徴の一つである。勿論、それは平安時代にも行はれたことで、必ずしもこの期に創始したのではないが、茲に至つて流行し、古を偲ばしめると同時に、新様の味を添加したところに新古今の人々の技倆を示した。それは左の如くである。

(本歌) ながむれば千々に物こそ悲しけれ、我身一つの秋にあらねど (古今集)

(新歌) ながむれば千々に物思ふ月にまた、わが身一つの峰の秋風 (長 明)

(本歌) 風ふけば峰にわかるゝ白雲の、たえてつれなき君の心か (古今集)

(新歌) 櫻ばな夢か現かしら雲の、たえてつれなき嶺の春風 (家 隆)

(本歌) 月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして (伊勢物語)

(新歌) 里は荒れて月やあらぬとうらみても、たれ浅茅生に衣うつらむ (良 經)

右は、一例にすぎないが、新古今の作家が古歌を翻案した巧みさを知ることが出来る。ただ本歌

取りなるものが、元來新趣向の展開にあつたとしても、遊戯的に流れやすく、ともすると、技巧の末を追ふ氣味があることを免かれ難い。が、短歌の上に新趣向を練るべき一個のよき方法であつたことは事實であつた。定家は本歌取りの方法を「毎月抄」に於て説き、「本歌の詞を餘りに多くとる事は、あるまじきにて候。其様は詮に覺ゆる詞二ばかりとりて、今の歌の上下の句に分ち置くべきにや」と注意し、順徳天皇は「八雲御抄」で「言葉をとりて風情をかへたるはよし。風情をとる事は大に見苦し」といはれた。以上の如く、本歌取りについて、作歌上、種々研究を重ね、時には漢詩などからも趣向を借りることがあつた。

それから新古今に於ては、所謂秀句を尙んで、奇警、秀拔、巧緻の感じを興へる新造語が多かつた。「床の霜枕の氷」、「空しき空」、「鶯の涙のつらら」、「身をしる雨」、「嵐をわたる聲」、「秋に驚く夏の夢」、「戀せぬ人の袖の色」などいふのが、それである。いかに新古今の人々が修辭に苦心したかがわかる。

(4) 定家と家隆

藤原定家は、新古今歌人中の第一人者を以て目せられる。彼は俊成の子で、和漢の學問に通じ、

後鳥羽上皇の勅を奉じて、新古今を撰したほかに、後堀河帝の勅により、「新勅撰集」をも撰した。歌人としての彼は用意非凡、精力に富み、非常に熱心であつた。家居の際は室を開け放つて南方を望みつつ、淨几の前に端坐して句案し、また深夜、桐火鉢によりかかりながら靜かに作歌に耽つた。且つ歌學の組織にも力めて、議論に批評に彼一流の識見を示し、著書には、「詠歌大概」を初め、歌集に「拾遺愚草」(短歌三千八百二十八首)、日記に「明月記」などがある。そして仁治二年、八十歳で卒去した。

彼は父俊成の後を承けて平安文化の傳統を繼承し、常に修辭の美に工夫を凝らしたばかりでなく、内面的の深さを加味しようと力め、そこに独自の新風格を作りあげた。新古今の歌のうちには、概ね純客觀の敘景歌よりも、それへ主觀を投影した形ものが相應にあるのは、つまり、定家等の影響から來たのである。例へば、彼の「見わたせば花も紅葉もなかりけり、浦のとまやの秋の夕ぐれ」の如きは、漁村の蕭條たる景色を詠んだのであるが、一面に於て、「花もなければ、紅葉も見えぬ」といふ上に主觀の色彩が加はつて、おのづから特殊の風情を添加してゐる。さういふ風の特徴が定家の歌に見える。定家の秀詠たる「駒とめて袖うちはらふ影もなし、さ野のわたりの雪の夕暮」は、萬葉集で「苦しくも降りくる雨か三輪が崎、さ野のわたりに家もあらなくに」

と有りの儘の光景を歌つたのを採つて情趣化したもので、「袖うちはらふ影もなし」といつたところ

ろに主觀の倒映があつて、そこに新詩味を生じてゐる。

總じて彼の歌には、靜寂な光景、幽雅な風光を歌つたものが往々あつて、さうした趣味が彼を支配してゐたらしい。「みやこにも今やころもをうつ山、ゆふ霜はらふ蔦の下みち」の淋し味、「うづくにか今宵は宿をからころも、日も夕暮の峯のあらしに」のわびしさ、「おほ空は梅のほひに霞みつつ、曇りもはてぬ春の夜の月」の靜けさ、いづれも定家好みの風景で、所謂「幽玄」の色が漂つてゐる。その他、彼の四季の歌としてすぐれた二三を左に掲げる。

梅の花にほひをうつす袖のうへに、軒もる月の影ぞあらそふ
霜まよふ空にしをれし雁がねの、かへるつばさに春雨ぞ降る

袖にふけさぞな旅寝の夢も見じ、思ふかたよりかよふ浦風

また、戀歌にも定家獨自の色合が出てゐる。「床の霜枕のこほり消えわびぬ、むすびもおかぬ人のちぎりに」、「年もへぬ祈るちぎりは初瀬山、尾への鐘のよその夕ぐれ」、「歸るさのものや人のながむらむ、待つ夜ながらの有明の月」などは殊に言ひ廻し方が巧みである。特に後の二首は、複雑な思ひを織り込んで、戀歌の上に新味を加へてゐる。唯、力量さに缺けてゐるのは遺憾

である。

要するに、いづれの點から觀ても、定家は、當時の歌壇に於ける大先達で、新代の傾向を創始したところに、彼の獨自のものがあるのである。

定家の次に當然、思ひ浮べらるるのは藤原家隆である。彼は中納言光隆の子で、早く藤原俊成の門に入り、歌道にいそしんだ。一代の作歌、六萬首に上つたといふのを見ても、いかに彼が精進、倦まなかつたかがわかる。その家集を「壬生集」といひ、尙「和歌口傳」の著書があるといはれるが、この方は、彼の手に成つたかどうか、正確にはわからぬ。彼は晩年、大坂郊外(天王寺村)に住居し、念佛讀經に力め、且つ作歌に對して、依然熱中することも怠らなかつたといはれる。家隆の作には、定家の象徴的傾向を一層押し進めたやうな具合が稀に見えるが、何れかといふと、大體に於て、定家の如く新奇を求めず、聲拔を追はず、穩健着實に近い作風を示してゐるやうに思はれる。その代表的な歌は左の如くである。

鳴の海や月の光のうつろへば、浪の花にも秋は見えけり

濱松の梢の風に年ふりて、月にさびたる鶴の一聲

霞たつ末のまつ山ほのくくと、波にわかるよよこ雲の空

幾里か月の光も匂ふらん、梅咲く山の峰の春風

古里の庭の日影もさえくれて、桐の落葉に霞ちるなり

梅が香にむかしを問へば春の月、こたへぬ影ぞ袖にうつれる

明けぬるかこころも手さむし菅原や、伏見の里の秋の初風

あけばまた越ゆべき山の峰なれや、空ゆく月の末の白雪

下紅葉かつ散るやまの夕時雨、濡れてやひとり鹿の鳴くらむ

ながめつゝ幾たび袖に曇るらむ、時雨にふくるありあけの月

家隆の作品中、その主観と客観とが渾融して特殊の風格を作り出してゐるのがある。例へば、「鳩の海や」、「あけばまた」、「ながめつゝ」などの歌が、それである。そこには作者の主観が自然のうちに沈潜して、敘景の上にも、深みを加へ、情趣を添へ、そこに一味の餘韻を脈々と波立たせてゐる。さうしたところに、やはり新古今一流の特色が見えるのである。

(5) 長所・短所

定家、家隆以外、新古今集の作家の秀歌を拾つてみると、

人住まぬ不破の關屋の板庇、荒れにしあとは唯秋の風

(藤原良經)

櫻花比良の山風吹くまゝに、花になりゆく志賀の浦波

(同)

暮れてゆく春の湊は知らねども、霞におつる宇治の柴舟

(寂蓮法師)

うかひぶね高瀬さしこす程なれや、むすぼほれゆく篝火の影

(同)

夕月夜しほみちくらし難波江の、蘆の若葉を越ゆる白波

(藤原秀能)

山ふかみ春とも知らぬ松の戸に、絶えくゝかかる雪の玉水

(式子内親王)

日かずふる雪げにまさる炭竈の、烟もさびし大原の里

(同)

狩りくらし片野の眞柴をりしきて、淀の川瀬の月を見るかな

(左近衛中將公衡)

以上挙げた秀歌によつて觀ても、新古今には、古今を凌ぐ力が十分にある。古今よりも、遙かに内容、表現の上に於て進んだところがある。即ち、古今のやうに理窟に囚はれず、また古今のやうに嫌味に墮ちてをらない。けれども、新古今にも不満足がないとはいへない。それは、(第一)短歌を上品なものとして極めて了つて、餘りに高踏的になつたこと、(第二)眞情や實感を直ちに打ち出さないで、餘りに工夫・趣向を凝らし過ぎたことである。

本來、短歌は貴族階級の獨占ではなく、また上品ぶらねばならぬ必要もない。その題材も、花鳥

風月、戀愛だけを主とすべき約束が定まつてゐるわけではない。ところが、新古今においては、さうした題材の範圍を定めて、古今集以外に出てをらない。題材は本來、時代に伴なつて新しきものを加へねばならぬ筈であるが、新古今にはそれが無い。即ち實生活に對して縁の遠いやうなものが採り入れられ、一にも二にも花鳥風月でなくてはをさまらないとする風があつたのは、餘りに保守にすぎたとおもふ。

それに戀愛その他、抒情を主とすべき歌に於て、實感を披瀝することを避け、故らに遊離的に婉曲な表現を採つたのは、上すべりの感じがして物足りない。戀愛に關する短歌の多くが想像から成り、或はその情緒をぼかして、徒らに上品を装つたことは、當時の風習、傾向によつたとしても、餘りに生命感に乏しい憾みがある。

のみならず、その餘韻・餘情も大抵内容から來てゐるのではなく、修辭・詞藻の巧妙さによつて、餘韻あり餘情あるかのやうにおもはせる歌が少くない。總じて新古今の歌人は、思想上、何ら深い造詣がなかつた。哲學的に深刻であるとか、宗教的に冥想三昧に入るとかいふほどのことが殆どなかつた。ただ藝術至上主義の上から、表現を巧みにして、餘韻・餘情あるやうに見せようとした丈けに止つてゐるのが多い。

以上のやうな缺點、不満が新古今集にはあるけれども、その長所、美點も亦決して少くなく、行き詰つた古今集を超越して、「千載集」の新傾向を採り入れ、それに一段の新光彩を加へたところに新古今集の詩境があつたのである。

第三章 西行と實朝

この時代の歌壇に於て、「新古今集」以外に獨歩の道を歩いた二人の名手がある。それは西行及び源實朝であつて、定家と對立して三つの潮流を代表してゐる。即ち定家は平安朝の短歌系統の特質を代表し、實朝は新興歌壇の先驅者としての傾向を代表し、西行は時代を超越した自然詩人の特色を代表する。

西行は作られて歌人ではなく、生まれた歌人である。時流を追ふ歌人でなく、時流を超越した歌人である。その名利に淡泊で、一生を行雲流水に託し、自然の友となり、何等求むるところがなかつたことが既に詩であり、また歌であつた。

西行には道心と花月風流の情と、世間的な俗情とが相絡んだ痛ましい、悲しい味はひがある。當時の歌人が、自然に對し、戀愛に對し、形式的な机上の空論を並べて、餘所行きの無常觀、宗教觀を歌つたのに對して、西行は諸國を放浪して生きた山水を材料とし、生きた感情を歌つた。彼

の歌はその實生活の歎かざる聲であつた。この事は彼の強味であつて、定家に對するやうに、時代により、見る人によつて、その價值を上下されない所以である。

彼は俗名を佐藤義清のりきよと云ひ、藤原秀郷の後胤である。其の家は代々勇武を以て知られた關係から、彼も北面の武士として鳥羽上皇に仕へ、左兵衛尉に任ぜられた。上皇は彼の才能を認めて、登庸しようとしたが、彼は決して立身を望まず、其の上、世間の險惡な風潮を觀て、漸く出離の志を起した。折柄、彼の一族、憲康の頓死するに會して、つくづく世の無常を感じ、「恩を捨て、無爲に入るのは如來の教である」といひ、可憐な四歳の女の子が彼の手に取りすがるのを素氣なく拂ひのけ、急に家を出て嵯峨に赴いて出家したと傳へられる。時に西行は二十三歳であつた。

彼は「出家の身は、住家もない。唯行脚して一所不住に終るべきである」と考へ、爾來、旅から旅への生活を送つた。先づ京を後に高野山に登り、その佛堂に參籠した後、吉野の奥深く分け入つて草庵生活を營んだ。それから草庵をあとに紀州熊野に赴き、權現に參詣したが、更に道を轉じて伊勢にゆき、大廟の前に額づいた。この頃、漂泊の思ひは一層深く、一笠一杖、鎌倉へと志して東海道を歩き、途中、富士の姿を仰ぎつつ鎌倉に入ると、賴朝に謁した。その際、彼に贈られた銀製の猫を「自分には用がない」と門前の乞食に與へて去つたといふ逸話が残つてゐる。

その後、西行は奥州に下り、一旦、京へ引き返したが、やがて中國方面に旅し、海路、四國に渡つた。その際、弘法大師の靈場に參詣し、遍歴を終ると、更に筑紫をも巡遊した。かうして西行は、ほぼ日本國內の半ば以上を歩き廻つたのである。晩年、彼は洛東雙林寺のほとりに草庵を結び、平和な日を送るうち、建久元年二月、七十三歳で示寂した。曾て彼は、その風懷を述べて、「ねがはくば花のもとにて春死なむ、そのきさらぎの望月の頃」と言つたが、偶然、その願つた頃に世を去つたのである。彼の歌人としての業績は、「山家集」のうちに收められてゐる。

西行は厭世觀から淨土欣求の思想に感化されたが、しかし冷たく悟りすますには、餘りに情が足りすぎ、情に徹するには、餘りに道を思ふ心があつた。が、結局、彼は、やはり詩人であり歌人である。彼は、その煩悶や苦惱を放浪の旅によつて忘れ、自然美に親しむことによつて忘れ、更にそこから、只管、自然の奥深く分け入つて、幽玄・靜寂の上に、一種の安らかさを見出だしたのである。けれども、それからもう一つ勇猛心に鞭つて自然の根本に横たはる大生命に參ずるところまでゆき得なかつた。それは、彼が餘りに多情多恨で、その最後の日までいくらか心の動搖をやめなかつた生を送つたからで、そこに却つて西行の人間味の深さを覺え、限らない親しみを感ずるのである。

以上のやうな立場から西行の歌を見ると、その苦惱にも、その煩悶にも、また自然の上に於て、眞生命を掴まうとした彼の心持にも十分同感出来る。蓋し彼は眞實である、正直である。決して悟り澄ましたやうな風を装はない。又心にもない虚偽を歌はうとしない。歌は彼の人生行路に於ける懺悔録であり、心的向上への記録であつた。彼は勿論、歌の技巧といふことをまるで忘れて了つてはゐないが、いづれかといふと、技巧は、彼の前にあつては末である。唯、彼は歌を通して眞實に懺悔せんが爲に歌ふ。その意味に於て歌と彼との間には何の隔りもない。歌とは西行であり、西行とは歌である。

西行は厭世觀から離脱する爲に自然美の懷に、靜かなる休息の床を求めようとした。當時の人々は、大抵さういふ場合に佛門に赴くだけで、彼のやうに廣く自然界に放浪し、深い憧憬を以て自然の前に全身を投げ出すものは少かつた。思ふに、西行が自然に向つてその慰めを求め、安心さへも求めた所以は、自然は無私であり、坦率であり、宏量であることを知つたからである。西行はそれ故に自然を愛し、自然に親しんだ。自然は西行に取つて、光明であり慰安であつた。それで西行は「都にて月をあはれと思ひしは、數にもあらぬすまひなりけり」と田園の月を讚美し、更に吉野山にゐたときには「吉野山去年の枝折の道かへて、まだ見ぬかたの花をたづねむ」と自

然憧憬の情を述べ、人里離れた山居の静閑を慕うては「遙なる岩のはざまに獨り居て、人目思はでものおもはばや」と歌つた。そこに西行の自然愛慕の心が深く浮び出てゐると同時に、厭世悲痛の心は、自然の美によつて、餘程柔らげられたことが察せられる。

かうして西行が自然を愛慕した結果、彼の歌の大半は、自然禮讃となり、自然に於ける種々の美を歌つた。が、いづれかといふと、西行の歌ふ自然は、優艶や華麗や豪壯や雄大なものではなく、清淡、幽雅なものであつた。そこに西行の自然に對する好みを示したのである。つまり、彼の歌に現れた自然は甘美な哀愁を含み、淋しいうちに、またしめやかな間に、しみりした雅味を湛へてゐる。

夜もすがら月こそ袖にやどりけれ、昔の秋を思ひ出づれば

山がつかた岡かけてしむる野の、さかひに立てるたまのを柳

ほととぎす深き峰より出でにけり、外山のすそに聲の落ちくる

きりぎりす夜寒に秋のなるまゝに、よわるか聲の遠ざかりゆく

横雲の風のわかるゝしのゝめに、山飛びこゆるはつ雁の聲

よられつる野もせの草のかけろひて、涼しく曇る夕立の空

西行は自然のうちで、月色美を殊に愛した。彼の月の歌は、新古今にも出てゐて、「月を見て心うかりしいにしへの、秋にも更にめぐりあひぬる」、「月の色に心をきよく染めましや、都を出でぬわが身なりせば」、「すつとならば浮世を厭ふしあらむ、我には曇れ秋の夜の月」など、月に對して洩らした西行の感情がいろ／＼ある。茲に至つては、西行は自然と一如したかの如く見えるのである。

しかし、彼が、

月ならで音づる人もなかりけり、山めぐりする時雨ならでは

道もなし宿は木の葉に埋もれぬ、まだきせさする冬籠りかな

の幽寂な心境に入り、更に一步を進めて、

うらくと死なむするなと思ひとけば心のやがてさぞと答ふる

の境に入つて、安心決定の常寂光土に歸入するまでの努力と精進とは、容易でなかつたに違ひな

要するに西行は徹底自然詩人であつたが、複雑な事柄を詠み込む點に於ては新古今時代の潮流に棹さし、そして眞情を歌ひ出す點に於ては萬葉に復歸した者といふべきである。

實朝は源頼朝の第二子で、兄頼家が悲惨な死を遂げた後を繼いで、征夷大將軍に任ぜられ、累進して右大臣となつたが、承久元年正月、鶴岡八幡宮で公暁（頼家の二男）の爲に殺され、二十八歳で世を去つた。彼が呼吸した時代は陰謀や暗殺や策略などが打ち續き、殺氣、至る處に満ちて不安動搖の空氣が色濃く流れてゐた。従つて彼の地位も亦不安で、周圍に恐しい鐵手が動いてゐるのを知ると、彼は不快な心持にならざるを得なかつた。殊に彼は北條義時の專權を憎み、時に反抗の態度を示したことさへある。實朝が渡宋のことを思つて、陳和卿に大船を造らしめたのも、周圍の形勢に對して少からぬ不滿を抱いたからであつた。

が、渡宋のことは、造船の失敗の爲に果さなかつた。茲に及んで實朝の美しい夢が脆くも破れると間もなく、彼の悲痛な最後の日が來た。要するに、實朝の一生は、その兄頼家と同じく、はじめから灰色の運命のもとに置かれてゐた。彼が政治に冷淡となり、文藝に没頭したわけは、天性その方面に嗜好があつたにもよるが、一つは平生の不安から免れ、不快から解放されようと願つた爲であつた。

悲劇の人實朝の歌が、おのづから實感に裏附けられ、時代の陰影を帯びたのは當然のことで、その環境の上から人生を思ひ、國家を念頭に置かぬわけにゆかなかつたのであらう。偶々その師定家から贈られた萬葉集は、實朝の心持にびたりと一致した。そこで彼は、定家に教へられた平安系統の歌から遠のき、より多く萬葉に親しみはじめたのである。彼の晩年の歌が、概ね萬葉調であるわけは、それが實朝の感懷を託するにふさはしかつたからだと思ふ。

實朝は政治上、何等の活動も爲し得なかつたが、文藝上では、十四歳頃から短歌を學びはじめ、次第にこの方面の造詣を重ねた結果、比較的著しい業績を残した。彼の歌は、「金槐集」に收められて、その數、七百餘首に上つてゐる。その進歩の道程はこれを二つに分けて見るのが便利である。即ちその第一期の作は新古今尊重時代、第二期の作は萬葉崇拜時代に成つた。彼が第一期の際、定家の作風に私淑した時分にも、相當、歌人としての天資あることを多少とも示した。ただ新古今尊重時代の彼の歌には、その個性や實生活がまだはつきり現れてゐず、やはり定家の唯美主義を奉じたと見るべきものが多い。ただ彼は、一體に平明な歌、素直な歌を詠み、所謂「幽玄」の旨に對して、故らに合致しようとしなかつた點がよいと思ふ。この時代は結局、萬葉崇拜時代に到達すべき準備期と解してよい。従つて、特に秀歌として數へ得べきものが存外少いやうである。勿論第二期に入つてからも、實朝は新古今調を思はせる歌をいくらか作つたから、それを合はせて見ても、やはり萬葉調ほどの際立つた独自の色合が冴えて見えない。左にこの系統に屬す

る秀歌二三を録する。

和田の原八重の潮路にとぶ雁の、翅のなみに秋風ぞふく

ふらぬ夜もふる夜もまがふ時雨かな、木の葉の後の嶺の松かぜ

むかし思ふ秋の寝ざめの床の上に、ほのかに通ふ峰の松かぜ

藻鹽やくあまのたく火のほのかにも、我思ふ人を見るよしもがな

思ひいでて昔を忍ぶ袖の上に、ありしにもあらぬ月ぞ宿れる

以上の如き歌を作つた實朝は、萬葉集に親炙するに及んで、俄にその個性の輝きを示し、生活に即した歌を詠むことが多くなつた。即ち彼は、在來の唯美主義から進んで人生主義の方へ歩みを轉じた。それにつれて、彼が將軍として、武人として、切實に感ずるところを歌の上に表現し、

定家から學んだ高踏的態度から漸く離れ去つた。この事は實朝の歌境に於ける一進歩である。當時、定家の歌風は天下を風靡し、萬葉の古調を學ぼうとするものは殆どなかつた。新古今から溯つて古今を思ふものはあつても、萬葉まで進んで見るものは殆どなかつた。さうした時代に當つて、實朝が自ら進んで萬葉人を仰慕し、萬葉の古調に共鳴したのは、どんな動機に出でたか、これを嚴密に推定するわけにゆかぬけれども、兎も角、實朝が時流のみを追はず、自ら可とする

ところに就いたのは一見識であつた。京の公卿、搢紳としてではなく、鎌倉の武將としての感情を歌の上に表白するには、勢ひ新古今調から離れねばならぬ事情があつたことと察せられるが、なほ眞實を愛する實朝の性格が、勢ひ萬葉の自然その儘の態度に強い共鳴を感じたものと思ふ。それに武家に於ては、在來の定家流のロマンチズムより現實主義を尙び、詩的幻想よりも武斷思想を重んじたのであるから、新古今の傾向は到底、鎌倉に於ける新時代の空氣と一致し難かつた。従つて京都の貴族趣味、古典趣味に合致した優婉流麗な歌調よりも、剛健・素朴な武家趣味にふさはしい萬葉調が迎へらるべき必然の勢が隱約裡に動いてゐたと思はれる。それは實朝が萬葉に私淑した一因ではなからうか。かうした新しい立場に移つた實朝の歌には、見るべきものが多い。左に秀歌を録すると、

山はさけ海はあせなむ世なりとも、君にふた心我あらめやも

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や、沖の小島に浪のよる見ゆ

大君の勅をかしこみ父母に、心わくともひとにはめやも

時により過ぐれば民のなげきなり、八大龍王雨やめたまへ

大海の磯もとどろに寄する波、われてくだけてさけて散るかも

ものゝふの矢並つころふ小手の上に、霞たばしる那須のしの原
 吹く風のすずしくもあるかおのづから、山の蟬なきて秋は來にけり
 ものいはぬ四方のけだものすらだにも、あはれなるかなや親の子をおもふ
 我宿の梅の花さけり春雨は、いたくな降りそちらまくもをし
 ひむがしの國にわがをれば朝日さす、藐姑射の山のかげとなりなき
 大體に於て、單純率直で、太い線を以て、その所懐を表現したところに、鎌倉の武將らしい佛が
 出てゐる。それは在來の調子と全くちがつたもので、思ひ切つて自己革命を歌の上に實行して舊
 衣をぬぎ捨てたものである。そして新古今集の人々が全く觸れなかつた國家のこと、人生のこと
 に觸れていつたところに、實朝独自の境地が光つてゐるのである。

要摘 日本文學講説 上卷 終

(三照堂製本)

昭和十五年五月十一日印刷
 昭和十五年五月十五日發行

要摘日本文學講説 上卷
 定價貳圓參拾錢

著者 館岡俊之助

發行者 小林良太郎
東京市神田區神保町二丁目四番地

印刷者 松村保
東京市神田區西神田二丁目四番地

松村印刷所印刷

發行所

東京市神田區
 神保町二丁目四番地

日本社

電話九段(33)一〇四三番
 振替口座東京二二〇一四番

本社出版物中、萬一落丁・嵐丁・逆綴等不完全な品がありましたら、御手数ながら御申
 出下さるやう御願ひ致します。たとひ御願後でも、必ず御取換へ致します。

(2)

198
435

終

